
魔王の教典

仲原 敬介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王の教典

【Nコード】

N1828X

【作者名】

仲原 敬介

【あらすじ】

異能の力を持つ、能力保有者の存在が認められ世界各地で研究競争がされている頃。

日本の首都をも越える街、通称『要塞』では連続殺人事件が起きていた。

そこに住む潜在能力検査で他の大多数同様、能力保有皆無の判定を受けた少年蓮見流風は異能の能力とは無縁の生活を送っていた。隠されたもう一つの人格が能力保有者であることも知らずに。

プロローグ（前書き）

頑張つて書いてみました。

読みにくいとは思いますがどうぞよろしく願います。

ブローグ

『――です。現在、詳しい死因を調査中ということですが、犯行の手口からみて最近おきている無差別連続殺人事件との関係があると思われます』

『ありがとうございます。いやあ、中島さんどう思います?』

『間違いなく例の事件の犯人でしょう。なにせ、今までの事件と酷似する点が多すぎます』

『仮にこれが例の事件と関わっているとすればこれで八人目の被害者が出たということになります』

『犯行の場所も場所ですね。首都をも越える摩天楼や各種企業の本社があるあの要塞都市ですよ。できてから十年経ちますが色々不思議な事件が起きますよね』

夕方のとある報道番組でいつものようにニュースが流れる。
怪奇事件の内容を会話を絶やすことなく、続けるキャスター達の憶測が飛び交い、やがてコマーシャルに変わった。

『要塞都市は日本や世界の未来を支える最新技術やテクノロジーの開発に取り組んでいます。ぜひ一度、観光に来て下さい。日本最

高峰と言われる街があなたをお迎えします』

『お子様をお持ちの皆さん。出産予定がある皆さん。お子様が小
学生になったら、能力チェックを受けてみてはいかがですか？統計
によると日本人口の内、約二十万人が能力を持ちそのほとんどが現
在、二十歳未満だそうです。あなたのお子様にも可能性はあります
ぜひ、検査を』

もはや日常となった不思議きわまりないものや何の変哲もない
コマーシャルが流れやがて違う内容のニュースが始まった。
先ほどとは違いとても穏やかなほのぼのとしたものだ。

『苗床というのは中の食べものを美味しくするために食べもの事
態を包みます。』

農業大学の教授が研究室で熱心にカメラに向かって小さな研究成
果を説明している。前のニュースとはほど遠く、平和という言葉が
よく似合っている。

『苗床は中のものを隠すカモフラージュの役割を果たしている
という変わった効果もあると思うんですよ。ほら、ちやうどのこのぬ
かの中にきゅうりがあるように』

そこまで言うスタジオに切り替わり、コメントがいくつか交わ

されまた新しいニュースが入った。

（最後の部分使わなかったのか。結構、おもしろいこと言っていたのに……）

スタジオでカメラを回している三十代の男は仕事そっちのけでそんなことを思っていた。

あの教授へのインタビュー映像をとったのは彼であり、編集でカットされてしまった最後のシーンを知っているのだ。

今思うと中々きわどい発言だったからカットされたことに何の違和感もない。

そうメディアから発信されることのなかった言葉――

――この性質は善良なふりをして、実はとてつもない悪人だったというのに例えられますね

あの教授がどれくらいの頭脳を持っているかはわからないがとてつもなく恐ろしい頭の持ち主ということだけはわかった。なにせ、あの発言をニュースで流していたら間違いなく抗議され、下手したら職を失うことになっていたのだから。

そんな考えも仕事の忙しさと今日、起こった怪奇事件への興味ですでに消えかかっていた。

そして、彼は番組が終わる頃にはすっかり事件の内容を忘れてしまっていた。

それはインタビューに参加した他の仕事仲間も同様であり、さらには張本人である教授ですら記憶に留めていなかった。

もう、その言葉を知っているものは誰もいない。

——そう、本当に本当に誰も知らなくなった。

プロローグ（後書き）

感想やご意見をお待ちしています。
しつかり更新していくつもりです。

第一話 連続殺人（前書き）

アクセスが五人という厳しい現状……
めげずに頑張ります。

第一話 連続殺人

季節は変わり、初夏になりはじめた。

日本各地では猛暑日に備え、最新のエアコンを買う客で電気店が昨年に比べ圧倒的な利益を上げていることがニュースを通じて伝えられている。

だが、ここ『要塞』と呼ばれる都市ではそんな暑さを気にも止めなくなる事件が起きていた。

「またか……これでついに二ケタ目突入だぞ」

「犯人……やっぱり能力保有者ですかね？」

要塞の東地区にある不動産会社の支店に二人はいた。

外見はなにもおかしくなかったが中に入るとそこだけ別の空間に入ってしまったかのような非現実的な光景が広がっていた。

カウンターには店員と思われる人物の死体があった。

その死体の奇妙なところは快楽犯の犯行のような無惨な死に方をしているのでもなく、今までに類を見ないように死に方をしているわけでもなかった。

まるで死んでいないかのような死に方だった。

カウンターにいる店員は居眠りをしているかのように椅子に座りながら絶命していて、二人も初めて見た時は本当に死んでいるのかと疑ってしまった。

よく見ると胸の辺りに血が染みを作っていて、何かで刺した後があるところから刺殺されたことが分かる。

さらにおかしいのは争った形跡がないところだ。

正面から刺されているはずなのに被害者が抵抗したり、逃げだそうとした形跡が一切なかったのだ。

この手口の事件は今年の春から頻発していて、被害者の数は今回で十人目に達していた。

同一犯の犯行と思われる事件で発生からもう少して三ヶ月経とうとしていたが犯人は未だ捕まらずにいた。

「西村警部、金井警部。ホルダーの方がおみえになっています」
二人を現場の鑑識をしていた人物が呼んだ。

（あいつらか……）

苦々しい思いを胸に店を出る。

外には立ち入り禁止のテープが張り巡らされ、その外側には野次馬が群がっていた。

内側では捜査員達が現場の鑑識やこの店で働く他の従業員に話を聞いていた。

しかし、よく見ると捜査員に混じってなぜか学生が関係者に話を聞いていた。

両方とも女性だが一人はセーラー服、もう一人はブレザーというところかは別の学校の生徒というのが分かる。

こちらが見ているのに気づくと二人は近づいてきた。

「西村警部、金井警部お疲れ様です」

ブレザーの女性が挨拶をしてきた。

金髪のロングの髪が腰まで伸びていて、優しげな印象を与える見た目をしている。

「ホルダーのお二人も学校帰りにわざわざ来てもらってご苦労様です」

「いえ、これも仕事ですから」

業務用スマイルかそれとも自然と出た笑みなのか微笑みながら答える少女。

彼女はまだいい。ちゃんと年上に対する礼儀というものがある。問題なのは――

「ちよつと、警察は何やってるの！　こんだけ事件起きてるのにまだニュースでは能力保有者の疑いつて……間抜けにも程があるじゃないの！　間違いなく能力保有者の仕業に決まってる！」

――こいつなんだよな

西村と金井は内心ため息をついた。

ただでさえ学生が警察に混ざって捜査をすることを好まない二人はこのセーラー服の少女にいつも悩まされている。

同じく金髪なのだがこちらの髪型はツインテールだ。

前にもしかして姉妹ですかと聞いたら散々なことを言われたのは今でも覚えている。

「ですが、死因は刃物等による刺殺なので犯人が能力保有者と決まったわけでは……」

「正面から抵抗を許さずにひとつきで殺しているのよ。まさか、被害者は居眠りしてたなんていうつもり？」

「それでも能力保有者という確証には……」

西村と金井が交互に意見をいうがセーラー服の少女は腕を組みながらフンツと笑いとばした。

「あんた達警察は知らないでしょうけど私達ホルダーは既に犯人の特徴を掴んでるのよ」

それを聞いても特に二人は驚かなかった。ホルダーと呼ばれる組織は全員が能力保有者で構成されている。彼らは独自の捜査方法で警察と合同で事件解決を目指すさい、ほぼ毎回先に犯人を捕まえている。

おそらく、ご自慢の能力を使って調査しているのだろうと西村と金井を含めた警察関係者は思っているが間違いなくそうだろう。

三人の会話に割って入るようにブレザーの少女が口を開いた。

「犯人は左利きで左手を怪我しています」

新しい犯人に対する情報に眉をひそめながら当然の疑問を聞いた。

「どうしてそんなことが分かるんですか？」

まあ、能力を使っただろうなと思いながら西村は問いかけたが少女の返事はこれまた彼らを苛立たせるものだった。

「すみません。これは機密事項でホルダー以外の人には言うてはならないんです」

つまりホルダー側は犯人の特徴は教えるけど方法は教えないということだ。

もしかしたら、やたら犯人が能力保有者と主張するのも警察には秘密のやり方で掴んだ情報なのかもしれない。

「本当に申し訳ございません。上の決定なので」

「いえ、お気になさらず。警察にも秘密にしたいことはありますから」

「フンッ。せいぜい頑張りなさいよ。どうせ、私達が先に捕まえるけど」

セーラー服の少女が余計なことを言わなければ綺麗に終わっていたのと思っていたながら二人は捜査に戻った。

二人の少女はホルダーの本部に帰っていったようだ。

「ほんと、あのツインテールの女の子生意気ですよね」

「まったく一緒にいるロングの子とは大違いだな」

捜査資料に目を通しながら金井がさっきの少女達の話振ってきたので付き合うことにした西村は率直な感想を述べた。

ですよね、あのブレザーの子は本当に可愛いですよねと金井が言いだんだん会話が進みいつのまにか犯人の話になっていた。

「確か犯人は左利きで左手に怪我をしている能力保有者なんですよね」

「向こうがいうことが正しければな」

仮に本当だとしたら明日にでも犯人逮捕のニュースが流れることになるだろう。

能力保有者かどうかは潜在能力検査で確実に判明する。

そして現在、潜在能力検査は要塞に住む人全員が受けている。

能力保有者とわかったものは要塞都市の上層部とホルダーが管理する能力保有者一覧に名前や住所、能力といったあらゆる個人情報と共に載ることになる。

つまり、要塞に住んでいる能力保有者を特定し、犯行に使用されたとと思われる能力を検査して、アリバイがあるかどうかを調べていけばだんだんと犯人候補は絞られていき最後には犯人にたどりつくというわけだ。

「早くて明日、遅くて三日後にはホルダーの連中が犯人逮捕だなこりゃ……」

「おっでましたね。西村さんの刑事の感」

「バカいうな。俺は警部だぞ」

「同じようなものですよ」

そんなたわいもない会話をしながら捜査をする二人。

きつとホルダーが先に逮捕するんだろうなとは薄々思っていた。
だが、犯人は次の日にも三日後にも捕まらなかった。

そして、十日が過ぎた。

*

「そろそろ暑くなってきたな……」

部屋の一室でベッドに寝転がりながら呟く少年がいた。
ベッドの周囲には本や空き缶、服などが散乱していた。

そして、彼の手には最新（といっても三年前に発売した）携帯ゲーム機があった。

画面にはスタッフロールが流れ、エンディングの真っ最中ということが分かる。

ふと時計に目を向けるとそろそろ明日になる時刻だった。

少年、蓮見流風は明日の学校に備え早い時間に寝ようとしたのだがあまりにも暑く寝つけなかったため、退屈を紛らわせようと昔のゲームをしようとしたのだが中々見つからず部屋のを四散させたあげくようやく見つけてゲームを開始したのだが思いの他のめりこんでしまい今に至っている。

「……よし今度こそ寝るぞ」

そう言って明かりを消そうとして、自分がやってしまった惨状に

気づいた。

「……大丈夫、明日早起すればいい」

誰に言うわけでもない言い訳を呟き今度こそ明かりを消して、ベッドに横たわろうとした。

その時、部屋の明かりを消すため伸ばした左手には包帯が巻かれていた。

第一話 連続殺人（後書き）

感想やご意見をお待ちしています。

主人公今回最後の方にチラッとでただけでした。

第二話 正体不明（前書き）

やっとお気に入り登録をしてくれた人が一人！
ポイントも入ってました！
これからも頑張ります。

第二話 正体不明

「犯人が見つからない？」

要塞都市の治安を維持するため能力保有者のみで構成された組織『ホルダー』の本部。そこは、中央地区の高層ビル街にあった。一見普通のビルに見えるが入り口付近には能力保有者の警備員が厳重に警備していた。その中で行われている捜査会議で顔をしかめる人物がいた。

彼は今回、要塞内で起きた無差別連続殺人事件の捜査主任を任されていた。

犯人は能力保有者ということが分かり、後は能力者一覧をチエックして、犯人が使用したと思われる能力を探し、証拠を揃えるだけのはずだった。

だが、いつまでたっても犯人が捕まらないどころ容疑者すら見つからなかった。

「犯人が使用した能力が不明な以上、候補を挙げるとキリがありません。しかも、能力保有者一覧には個人の利き手のデータは記載されていません」

捜査員の説明にその場に誰もが難しい顔をした。

彼らがいるのは本部の上層階にある会議室で全員が今回の事件の捜査に関わっているものたちだ。

そして、捜査員が言った左利きというのは犯人の特徴の一つだ。犯人が道具を使い直接被害者を殺害した場合、利き手を特定するのはそれほど難しいことではない。

傷のでき方、当たった角度、場所から簡単に利き腕を特定するこ

とができる。

さらに、ある方法を使った結果犯人は左手になんらかの怪我をしていることが判明した。

だが、犯人候補が拳がらない以上、その情報は使いものにならない。

まさか、能力保有者を片っ端から利き手と左手を怪我しているかを確認するわけにもいかない。

しかも、こうやって捜査が進まない間にも犯人の左手の怪我は刻一刻と治っていき、そのうち完治するだろう。

ただでさえ情報が少ないのにこれ以上犯人の特徴を失うのはそのような痛手だ。

くそつと主任は心の中で舌打ちをした。

実はこの男、口に出せない不祥事を起こしていた。

なんとかばれずに済んだが疑いをかけられただけでも彼の立場はかなり揺らぎ、今回の事件を期日までに解決できなければ責任をとる形で今の地位を失うことになる。

（まだ期日まで時間はたっぷり残っているんだ。もう一度、犯人が事件を起こせば証拠を掴めるかもしれない……）

市民を守る者として絶対に思ってはいけないことを思いつつ彼は新しい捜査指示を出した。

*

「……これどこでやったかな」

そんな独り言を呟くのはなぜか、頭に海賊帽子を被っている少年
蓮見流風だ。

彼は学校に行く準備をしながら左手の包帯を取っていた。

十日ほど前に左手の甲に一筋の切り傷があることに唐突に気づき
急いで包帯を巻いたのだがようやく完治したところだった。

それにしても自分はどこで怪我をしたのだろうか？ まったく心当
たりがない。

考えても仕方ないことなので朝食をとることにした。

「あなたに届けたいこの美味しさ」

自分が今、食べようとしているカップラーメンの安っぽいコマー
シャルソングを歌いながらお湯をそそぐ。

テレビを見ると巷で噂の連続殺人事件の特集が行われていた。

視聴者からすれば正体不明の連続殺人犯というのはかなり興味を
ひきつけるものなのだろう。

学校でもその話でちきりだ。

犯人の手口や目撃証言、また心理学者による犯人の人物像の考え
などと結構手の込んだことをしている。

『最初に事件が起きたのは北地区の路上で警備が倒れている被害
者を酔っぱらいと思い起こそうとして、死亡しているのが判明しま
した』

現場の映像が流れるが春から何度も見てるのもう興味が無い。

それより大事なのはカップラーメンの方だ。もし、ニュースに夢中になり、麺が伸びたら大惨事だ。

『――です。しかし、殺害された手口が同じだけで、同一犯と決まったわけではないんですね』

『はい、私の見解では複数犯による犯行だと思っています。目撃証言があつてどれもあやふやだったり、それぞれの証言に食い違いがあつたり。ここまで完璧な犯行を一人でやったとは考えにくい』

きつと犯人は複数でそれぞれの役割分担があると、さらに話を続けているがカップラーメンが出来上がったので箸をとった。

右手で。

第二話 正体不明（後書き）

感想やご意見をお待ちしています。

……あと、ポイントも

第三話 右手左手（前書き）

初めての感想が来てとてもうれしいです！ ランキング百位を目指して頑張ります。

第三話 右手左手

玄関で靴を履いている時に、海賊帽子を被ったままだということ
を思い出し慌て外して家を出た。

少年、蓮見流風は一人暮らしだ。

両親の元を離れ、学生寮に住んでいる。

要塞都市では学生が一人暮らしをしてる割合が七割と高く、彼の
ような学生は決して珍しくない。

世の中、少子高齢化と言われているが少なくとも要塞では若い世
代の人口が多い。

なにせ、あらゆる最先端技術と知識を売りにしてる街だ。他では
真似できない少子化対策でもしてるんじゃないか？ そんなことを
思いながら流風がいつも通り自転車を走らせて、駅に向かっている
とふと、向かい側の歩道にいる女子学生に目が止まった。

(……あの人、どこかで見たような？)

見覚えのある後ろ姿だった。

どこか懐かしい感じがするがだからといってそんな昔に会ったわ
けでもないような気がする。

話しかけるべきかどうかを悩んでいると彼女は人混みにのまれ、
いつのまにか見えなくなっていた。

下手に話しかけて他人だったら恥ずかしい思いをすることになっ
ていたからこれでいいと自分を納得させると流風は再び駅に向かっ
て自転車を走りださせた。

学校につき、教室に入るとクラスの何人かが例の殺人事件についての話をしていた。

やはり、近辺で起きた殺人事件に興味があるのか電車に乗っている最中にも何度もその話題を耳にした。

ニュースで遠くの場所で起きた事件を知るのとは話が違ふのだ。

教師達も生徒に学校が終わったら極力家に早く帰るようにと呼びかけている。最も青春を謳歌したい年頃の高校生が大会という遊びにはもってこいの場所が用意されているのだから当然、ほとんどの生徒がその忠告を無視している。

ちなみに流風も他の生徒同様、結構寄り道をしてから帰っている。

「なあ流風、数学の西尾がホームルームの前に抜き打ち小テストやるらしいぞ。」

当たり前のことだが話題はそれだけでなく、今のようなく普通の内容もあった。

「西尾先生の抜き打ち好きは今に始まったことじゃないからそんなに驚かないよ。前に職員室の机を勝手に調べたことがあるそうだし。当然、抜き打ちで」

「マジで！？ あいつ生徒指導だけじゃなくて教師指導も引き受けてんじゃないの？」

他愛ないもない会話を笑いながら続ける二人。

「よし、今からテストするぞ」

瞬間、黙る二人。

（聞かれなかったよな？）

（教室中、騒めていたし僕達の席はこのとおり窓際だから大丈夫だよ）

（さすが蓮見、小さな体に大人の考え）

（……小さいは余計だよ）

こっそりと会話を続ける二人。

小さいというのはそのままの意味で蓮見は同年代の男子に比べ、身長が低く、とても小柄な少年なのだ。

普段着をきた状態だと初対面の人に必ず、中学入りたてと間違えられ、どんなによくても中学二年生と思われるのが精一杯だ。

「蓮見、金井お話はテストが終わってからにするんだ」

こそこそ話しがばれ注意されたので素直に黙ってテストをやることにした。

配られたテスト用紙を見ながら右手にペンを持つ。

そして、流れるような動作でペンを机に置いた。

（無理だ……今の僕の部屋なみに大惨事だ……大惨事大戦だ……）

大惨事大戦に参加した新米の兵士、蓮見流風は完全に敗戦兵状態だった。

しかも、敗戦兵は流風だけではなく教室の半分以上の生徒がそうらしい。

無理もない。なぜなら、この問題は難しいうえに昨日初めて習ったばかりだからだ。

そんな問題を使って抜き打ちテストをする西尾に恨めしい思いを抱きながらも一度、問題を確認する。

問題数はたったの五問。しかし、圧倒的に難しい。

（おのれ……西尾軍。数ではなく、質で勝負してきたか！）

そんなどうでもいい戦争の時にいそうな軍師の真似をして、冷静になろうとするが当然不発。

なんとか一問書いたところで再び思考が止まり、気づいたらペンをまた机の上に置いていた。

（うう……なんか、眠くなってきた。昨日のゲームと難問の連携攻撃か……）

そんなことを思いながら蓮見は眠りの世界に誘われ、顔を机に突っ伏した。

——瞬間、間をあけることなく再び顔を上げた。

しばらく微動だにしなかったがテスト終了五分前に再度動き出し

た。

すると、先ほどとは違い迷うことなく、残り四問の問題をすらすらと解いていった。

シャーペンを持った左手で。

第三話 右手左手（後書き）

感想やご意見をお待ちしています。
主人公についてをやっと書けたなと思います。

第四話 同級生（前書き）

今回、ヒロイン登場！（前回後ろ姿だけでならでしたが）
まだ、具体的にどんな性格はあきらかにしませんかとにかく楽しみにしてください。

第四話 同級生

掃除が終わり流風は家に帰ろうとしていた。

電車の時刻を気にしながら学校を出て駅に向かって歩いている最中、今日の小テストについて考えていた。

掃除が始まる間際、テストが返却されたがなぜか、最初の問題を除いた全て（といっても四問だけ）が正解していた。

普通なら特に気にしないのだが、流風には最初の問題を解いた以降のテスト中の記憶がないのだ。

なぜ、解いた記憶のない問題が書かれて正解しているのか？

疑問に思ったが寝ぼけながらテストに挑んでいたから、ところどころ記憶が抜け落ちているのだろうと強引に納得することにした。

「蓮見流風君よね？」

テスト中の疑問が解決し、今日のテレビ番組について考えようとしていた流風は唐突に後ろから声をかけられた。

振り返るとそこには他校の制服を着た少女が立っていた。

帰宅途中の通学路で他校の生徒に話しかけられるというのは人生初めてのことなので戸惑うがなんとか冷静を保ち、少女の顔を見る。そこで、流風はある二つの事実に気づいた。

一つ目は彼女が今日、通学途中に見覚えがあったから気になった子であること。

二つ目は一つ目に関係することでもあった。

なぜ、正面から見て朝見た後ろ姿に見覚えがある少女だとわかったか。

それは、実際に会ったことがあり正面からと後ろから見た姿の特徴を今、完全に思い出したからだ。

若干、つり目気味の強気を思わせるような目。

流風と同じ黒髪だがほんのりと藍色がかかっているような髪。

決して高くないが流風が小柄なのでどうしても一緒に立つと年上に見えてしまう身長。そして、その整った顔立ちを見て、一瞬で誰かを理解した。

「最上……百合……さん？」

見間違えるはずないがそれでもはつきりと名前で呼ぶことができない。

流風が知っている少女、最上百合がこの街にいる可能性は極めて低い。

最上百合とは中学が同じで一年生と三年生の時に同じクラスであり、本人はどう思っているか知らないが流風自身は親友と思っている。

そんな二人の関係は良好で当然のように受験シーズンの時は互いの進路について話し合った。

その時、彼女は両親の希望する学校に入学するため引越し、地元から離れると言っていた。

いや、その学校がここ要塞内にあるとなれば話のつじつまは合うことになる。

彼女の両親がどんな仕事をしているか聞いたことはないが確か、彼女の一家は代々、学歴を重視するエリート家系らしく相当な高給の職業に就いていると聞いたことがある。

今、日本でレベルの高い進学校が集まり、地位と名誉を手に入れられたり、名前を知らない人がいないほど有名な大企業の仕事の求人募集が多い地域はここ要塞である。

学歴重視の両親なら確かに要塞内の実績ある進学校に子どもを入学させたいと思うだろう。

流風の疑問混じりの確認に彼女は、はあとため息をつき呆れたように答えた。

「そんな風に言われても困るだけよ。最後に会ってからまだ半年も経ってないのに友達の顔を忘れたの？」

どうやら彼女は間違いなく最上百合のようだ。

さりげなく言葉の中に混じっていた『友達』というキーワードに嬉しさを感じながらも素直に謝罪の言葉を口にした。

「ご、ごめん。この街に最上さんがいるとは思ってなかったから違う人かと思つて……」

それを聞いた百合はさっきまでの不機嫌そうな顔を平常時の顔に戻した。

最も彼女の平常時の表情は彼女のことをまったく知らない人が見ると何を考えているか分からない冷たい顔をしてるように見えるのであまり大差がないように思えるが……

とにかく、許しをもらえたのでここは久しぶりに会ったもの同士が行うことで最も代表的なことの一つ、お互いの近況報告をするべきかと流風は考えだした。

もし、ここに鏡があったら本人も気づいてただろうが今、彼の顔は隠しようなない喜びの色が出ていた。

まさか、地元から離れた街で、地元の中学の同級生であり、親友の少女に会えるとは思ってもみなかったことだ。

素直に喜んでいる彼は会話を続けさせようと言葉を紡ごうとした。

——その時だった。

「流、流風君！　わ、私はあなたのことが好きなの！！」

今までの話の流れを無視するかのように。　　今までの話の流れからは絶対に想像できないことを彼は、

蓮見流風は、された。

最上百合に蓮見流風は告白されたのだった。

第四話 同級生（後書き）

感想やご意見をお待ちしています。

次回、主人公の告白に対する返答は？

第五話 告白（前書き）

お気に入りの人やアクセス数が増えて嬉しいです！
これから頑張ります。

第五話 告白

蓮見流風は街を疾走していた。

電車に乗り、駅から降りると自転車で一目散に自宅へと向かった。途中、公道で警察が噂の殺人事件についての調査をしているのが目に入ったが気にもしなかった。

今は、それどころでない。

それどころではないのだ。

アパートに見えればマンションにも見える学生寮をかけのぼる。

自分の部屋の扉の鍵を開け、部屋に転がりこんだ流風は息をきらしていた。

荒い呼吸の中、ベッドに倒れこみゆっくりと思考を安定させようとする。

今だに実感が沸かないが確かにされたのだ。

された。

受動態の言葉であり様々な意味を持つ動詞に変わることができ、『された』事態ではあまりに幅が広すぎて逆に意味が分からなくなる。

『読まされた』なら本を誰かに読まされたということになり、『見られた』なら誰かに何かを見られたことになる。

『殺された』なら丁度、今自分が住む街で起きている殺人犯に殺された被害者と同じ目に会ったといえるだろう。

だが、それだと今流風がこうやって家に帰宅できているわけがないので当然違う。

流風は仰向けになり、じっと天井を見つめる。

すると、先ほどの出来事を映像のように思い出すことができた。

まるで、天井がスクリーンになり、目から映像を投影してるかのようだった。

＊

そこには二人しかいなかった。

時間帯を考えれば他の下校者や車が行き交いしていそうなものだが、不思議と誰も通らなく、そこだけ空間を切り取ったかのようだった。

その空間内では常軌を逸することが起きていた。
いや、実際にはそう珍しいことでもない。

そう告白されるなんて何にも珍しくない。むしろ陳腐なことだ。
しかし、『された』本人からすればまったく違う。

された本人——蓮見流風からすれば自分がするならともかく相手からされるのは火星人がいたことよりも、車が自由に空を飛ぶことよりも、カブトムシが水陸両用になることよりも圧倒的に可能性は低いと小学生の頃より思い続けていた。

だが、彼は告白された。

目の前にいる中学時代の同級生に。

想定外の出来事にフリーズするパソコンのように彼の思考もまた活動を停止する。

それから、きつちり八秒でなんとか彼の頭脳は活動を再開した。

それでも事態を把握するには同様に八秒要してしまった。

冷静に考えるとどんなに時間をかけても二秒とかからずに意味を理解できるほど簡単なことなのだがその時の流風には絶対にできな

いだろう。

流風に告白をした相手——最上百合は黙って返事を待っていた。流風は最上百合というのがどのような人物かというのを知っている。

無表情というほどでもないがあまり表情を変えず、どこかプライドが高いように見えるので少し取っつきにくい雰囲気を出している少女だった。

中学生時代実際にあった話だと学校一の成績を持ち、所属しているサッカー部でエースストライカーで部長という文武両道を象徴化したような存在であると同時に誰もが振り返ってしまうような中学生離れした美貌を持つ、年上の生徒会長の告白を。

「すみません。お付き合いできません」

という丁寧だが一片も揺らぐことのない意思で断ったことがあるほどだ。

そんな彼女が取り柄はもしかしたらあるかもしれないがふった生徒会長と比べると石ころと宝石ほどの差がある自分を好きというなんてとても信じられなかった。

彼女の顔を見るといつもの無表情さや強気なつり目は影もなかった。

そこにあるのは告白に対する返事を不安げに待つ少女の姿だけだった。つり目は不安を表すかのようにたれ目になっていて、告白の恥ずかしさからか顔を真っ赤にして、許しを懇願するかのような弱々しい表情になっていた。

「そ、その流風君……」

百合は続く言葉を必死に探そうとしている。

流風はそれを見て、自分も何か言わなければと思うが答えがまともでない。

とにかく、自分は告白されたのだ。理由やきっかけはまったく分からないが、それなら返事をしなければならぬ。

だが今、まともな答えをするのは絶対に不可能だと直感的に流風は気づいた。

ならばすることは一つ。

「も、最上さん!!」

しどろもどろにならないよう勇気を奮いたたせ、目の前の少女に向かって大声で話しかける。

百合は突然の大声に体を震わせるがしっかりと流風の方を見る。それを確認すると流風はまくしたてるように自分の返答を告げた。

「そ、そのっ！ 少々待ってほしいんだ。そんなに長くは待たせない。一週間以内には必ず答えを出すから次に会うときまで考えさせてください！」

不安な口調になりながらも今だせる自分にとっての最高の答えをはっきりと彼女に伝える。

最初は彼女も告白された自分のように呆然としていたがやがて慌てたように持っていたカバンからメモ帳を取り出し、ページの一枚を破り取りそれを流風に押しつけるように渡す。

「私のメールアドレスよ。答えが決まったら連絡して。……返事は直接聞かせてね」

流風がそれを受け取ると百合は消え入りそうな声で流風に言った。

＊

天井上映会が終わり、現実に取り戻された頃には夕日が沈もうと
していた。

夕食の準備をしながら流風は彼女の告白の返答について考えだし
ていた。

やはり、大切なのは自分が彼女のことをどう思っているかどうかだろ
う。好きと言っても様々な部類の好きがある。友達としての好き。

恋人としての好き。 家族としての好き。 自分は間違
いなく彼女のことを好きだ。

だが、それはどの部類に入るのだろうか？

恋愛において友達としての好きと恋人としての好きを混同してし
まうと良い結果に終わることはまずないという。

ならば、そこをはっきりしないといけないだろう。

それについて考えいたらいつのまにか夕食を食べ終えていた。

テレビ番組を見るきにも、勉強をするきにもならなかった。今は
ただひたすら考えていたかった。

そして、答えはあっけなく出た。

一週間以内と自分は宣言したが数時間のうちに答えにたどり着い
てしまった。

本当にあっけなく答えがでたので間違っているのではないかと思
い何度も考えてみるがやはり一つの結論に至る。

流風はゆっくりと目を閉じる。

しばしの静寂が流れ時計の秒針の音しか、しなくなる。

やがて、目を開けると机の上に置いてあった携帯に手を伸ばした。一週間あるからもう少し考えてもいいかもしれないと思ったがこの思いは絶対変わらないという確信を持っていた。

そして、なにより、彼女を一週間の間答えを待たせ、苦しめるのが嫌だった。

百合のメールアドレスに記載されていた、電話番号を押す。すると呼び出しをかけた瞬間に彼女が電話に出た。

『もしもし……流風君？』

そういえば自分と彼女はメールアドレスを交換したわけではないので、今彼女の携帯には知らない人から電話がかかってきたことになっているのだろう。

『うん、流風だよ。』

そう前置きしてから彼女が何かをいう前に流風は先に言った。

『返答が決まった。日時と場所に希望はある？』

すると、彼女はしばらく黙っていたがやがて返事をした。

『中央地区の第三駅に来て。私は西口の入り口で待ってるから。日時については、土曜日の午前十時までに来て』

さつき会った時とは違う冷静な声が受話器越しに聞こえる。

これが彼女を知っている人なら全員分かる平常時の話し方だ。

わかりましたと言い電話をきろつとすると最後に一言彼女が言っ

た。

『……電車賃は私が払うから』

そして、今度こそ電話がきれる。

流風はしばらくの間、電話をしていた姿勢で固まっていたがやがてベッドに倒れるように横になった。

（土曜日って明日だな……）

今日の小テストが終わった後、土曜日の予定について考えていたのだが無駄になったようだ。

今、よく考えると彼女は冷静なようだったが本当は気が動転していたのかもしれない。普通は土曜日ではなく明日と言ったほうが自然だったのだから。流風はもう何もすることがないと思い、部屋の電気を消し、眠りについた。

第五話 告白（後書き）

感想やご意見をお待ちしています。
……そろそろ能力が出ます。

第六話 午前十時三十五分（前書き）

次回からやっと能力が出ます。（确实）
今回はその全段階のような話です。
では、どうぞ。

第六話 午前十時三十五分

土曜日の午前十時三十五分。

蓮見流風は高層マンションの一室の前に来ていた。

隣には最上百合が扉の鍵を開けようとバックから鍵を取り出していた。

ここに来るまでのことを振りかえると途方もなく長い時間を過ごしたように思える。

実際には指定の時間会う約束をした場所に行ってから一時間も経過していないのだが、少なくとも流風にとってはその時間を今までの人生の中で一番長く感じていた。

特に十時十五分から二十分の間の五分間は長い長い演劇を見ているかのように錯覚するほどだった。

百合はバックから鍵を取り出すのに苦戦してらしく、流風はいつのまにか三十五分前のことを思い出していた。

*

午前十時。

流風は電車の中にいた。

そして、焦っていた。

約束の十時の少し前には駅につく予定だったのになぜか電車が遅れ、約束の時間に遅れていた。

その間にも自分が彼女に言う言葉を何度も再検討していた。他にもっと良い言い方があるのではないか？

だが、何度考えてもこの答えがベストだと本能が訴える。
再検討の回数が十回に到達しそうになる頃、やっと電車が駅についた。

*

「僕も好きです。付き合ってください」

結論から言って流風は百合の告白を受け入れた。

駅で彼女に会い、遅れたことを謝罪すると二人は近くの公園に移動した。

そして、流風が百合に答えを言った。

たったそれだけだ。告白に対する返答といえはかなりのドラマ性が付きまといっているイメージがあるが現実はこのなものだった。むしろ、ドラマ性がある方が珍しいのだ。そんな思いが自分から彼女に対する告白をした瞬間によぎったのだがそれでも流風が百合を好きということにはかわりなかった。

あまりに単純すぎる答えだが、きっと自分は彼女のことを友達としても恋愛対象としても好きなんだと流風は思った。

難しく考えるだけ無駄だと思い純粋な思いを伝えた。

繰り返すが、ただそれだけだ。

そして、彼女は――

――最上百合は黙って微笑んだ。

*

カチャリツという乾いた金属音が響き扉が開き、流風は現実に取り戻される。

あの後、百合が自分の家に案内すると言って彼はここに来た。

（……なんていうか……さっぱりしてるな……）

内心、流風は苦笑いしていた。

ドラマや恋愛映画ならもっと劇的な愛の物語があり、二人が仲むつまじく結ばれるものだ。

さすがに、流風はそこまでのことを求めていなかったがそれでも、多少の恋愛が盛り上がる展開がほしかったとも思っていた。

（まあ……これが一番良い恋愛の仕方なのかな）

恋愛物語だと話の内容を盛り上げるため、恋の障害がこれでもかと言わんばかりに立ちふさがってくる。

恋愛系の物語を鑑賞する人は必ずと言っていいほど二人のハッピーエンドを望んでいるので二ーズに答えるかのような作品事態もより良い終わり方を迎える。

だが、現実はお話とは違い障害が立ちふさがった場合、乗り越えられる保証がない。

劇的じゃなくてもいいから実る恋をしたい。
人として当然の心理だろう。

自分は軽い気持ちで彼女の告白を受けたのではない。

なら、彼女を悲しませないためにも精一杯頑張るしかない。

たとえ、ありふれた恋のあり方だとしても彼女と幸せになりたい。
それが、蓮見流風心からの願いだった。

扉の向こうから百合が部屋に入るよう手招きする。

指示に従い部屋に入るとゆっくりと扉を閉め、鍵をかける。

カチャリツと鍵を開けた時と同じ音が響く。

百合がした行動はとも当たり前なことだった。

カップル成立数分後とはいえ恋人を自宅に招きたがるのは本当に自然な行為だ。

——だからこそ、この後予想もしない惨劇が起こるのを流風は考
えることもできなかった。

第六話 午前十時三十五分（後書き）

漫画みたいに。。。偏という表示方をするならば。
次回、『監禁偏』スタート

感想やご意見をお待ちしています。

第七話 最上百合とゲルマイン（前書き）

サブタイトルでミスして前回は七話と表記していましたが、実際には今回が七話でした。すみません。

今回はかなり力を込めて書きました。

おこがましいようですが感想とポイントをできればお願いします。
では、どうぞ。

第七話 最上百合とゲルマイン

部屋に入って第一に思ったのは自分の部屋とは大違いだということだ。自分の部屋はそこそこ広いリビングが一つとお風呂とトイレの部屋が一つずつあるだけだ。

それに比べて彼女の部屋は広いのなんの。チラッと見ただけでも廊下を中心に左右に学生の一人暮らしとは思えないほどの広大な部屋が広がっていて、他に誰か住んでいるのではないかと錯覚するほどだった。

いや、この街の七割の学生が一人暮らしだからといって彼女もそうだとはいえない。

もしかしたら、他の家族が住んでいるのかもしれない。そう思った流風は何気なく聞いてみた。

「もしかして、他に誰か住んでるの？」

「ううん、私以外誰もいないわ」

先ほどの告白から一時間もたっていないが彼女はだいぶ落ち着いたらしく、すっかり自分がよく知る冷静な少女になっていた。

再会した時の動揺からすれば信じられないがこれが平常時の彼女の姿だ。

そのまま、奥に進むと木製の扉があった。その鍵を開けると彼女は中に入るよう促したので黙ってその部屋に入った。

そこにはベッドと本棚、学習机、クローゼットという学生じゃなくともよく使いそうな家具があった。

百合がベッドの上に腰掛け、流風は床に座る

「ここが、私の部屋よ」

流風もそう思っていたのでとりあえず、そうなんだと軽い返事をかえす。

周りをよく見ると棚の上にくまのぬいぐるみが置いてあり、普段の彼女からは想像もできないファンシーな物があるのに驚いた。

そうしている間にも沈黙の時間が過ぎ、やがて再び百合が口を開いた。

「今日から私達は恋人……よね」

事実の確認に流風は

「……うん」

と短く応える。

しつこいようだが、流風の告白に対する返答があまりにあっさりしていたため二人は恋人関係になったことに対する実感がわいてない。

何ともいえないがほんの少し気まずいような雰囲気が漂う。

この状況を打倒しようと、流風はとっさに告白を受けた時からずっと気になっていたことを聞いてみた。

「そういえば、どうして最上さんは僕のことを……好きになったんですか？」

話している途中で恥ずかしくなり、最後のところを消え入りそう

な声で聞くと百合はほんの少し笑いながら答えた。

「……人を好きになるのに理由はいらないっていわない？」

はぐらかす答えをする彼女の表情はいたずらっ子のようだった。

最上百合は基本的に周囲の人に対しては無表情で接するのだが流風だけには喜怒哀楽を見せている。

中学生の彼女を知るもので嬉しそうな顔と怒っている顔、悲しんでいる顔を見たのは蓮見流風だけである。

できれば、彼女の明確な返答を聞きたい流風としては彼女の答えは非常にやきもきするのだが、百合が頃合いだと見計らったのか本当の理由を教えた。

「まあ……色々あるけど単純に好きになったから好きになったんだよ」

？ はっきりいって意味がわからない。

好きになった理由が好きになったというのは答えと理由が同じで、堂々巡りだ。

もう少し詳しく説明してもらおうとすると唐突に彼女がベッドから立ち上がった。

「まあ……色々あるけど単純に好きになったから好きになったんだよ」

好きになったから好きになった？ はっきりいって意味がわからない。

好きになった理由が好きになったというのは答えと理由が同じで、堂々巡りだ。

もう少し詳しく説明してもらおうとすると唐突に彼女がベッドから立ち上がった。

「ちょっと待っててくれない？　もしかしたら、長くなるかもしれないけど……」

「あ、はい。いいですよ」

流風が承諾すると百合はベッドから立ち上がり、部屋の扉まで歩く。

ドアノブを握りながら彼女は振り向き近くの戸棚を指差す。

「そこに、お菓子が入っているから気にせずに食べて待っててもいいから。後……」

最後の部分を少し濁していたが、微笑みながら続けた。

「これからは、“最上さん”じゃなくて“百合”って呼んでくださいね」

そう言い終わると部屋を出て、扉を閉めた。

しばらく扉をじっと見つめていたが部屋にあった時計の秒針が半回転する頃、やっと視線をそらすことができた。

かなりグツときた。

視線をそらした瞬間。いや、そらすことができた瞬間、流風は心の奥底からそう思った。

今の彼女の言葉ほど自分の心を揺さぶったのではない。高校受験の面接本番で予想だにしない質問をされた以上だった。

（特に……あの“ください”ってところが……いい！ 最高だよ！）

控えめで謙虚な性格をしている流風とは思えないほど気持ちが高ぶっていた。

（あの敬語がなんか主従関係みたいで……いや、別に最上さんより上の立場になりたいわけじゃないけど……）

本当に別人じゃないかと思えてくる思考回路になりつつあったがなんとか気持ちを落ち着かせる。

（最上さん何しに行ったんだろう？ とりあえず待たないと……）

しかし、何もやることがないので待ち時間はとても暇になる。携帯でもいじるかなと思い、バックに手をつ突っ込んでいるとあるものが目に止まった。

彼の目線の先にはなんの変哲もないクローゼットがあった。特に気になることは何もないのだが。

（そういえば、最上さんってどんな服を着てるんだろう？）

無性に興味が沸いてきた。

思えば彼女の私服姿を見たことは一度たりともない。

今、部屋にいるのは自分だけ。服の所有者本人は用事で部屋から

出ていつているが先ほどの口振りからすれば戻ってくるまでに、あの程度は時間がかかるはずだ。

そこまで考えたところで自分がすっかりクローゼットの中を覗く気が満々だということに気づいた。

（やっぱり勝手に見るのは……でも、気になる！）

思考がどんどん頭の中を駆け巡っていく中、ある事実に気づいた。

（あれ、そういえば、なんで今、最上さんは私服じゃなかったんだろう？）

そう、流風は今まで彼女の私服姿を見たことがない。

今日の彼女の姿は告白された時と同じブレザー服だった。

なぜ、休日なのにブレザー服を着ているのか？

そんな疑問が一瞬、頭をよぎったが午後から学校で何か用事があるのかもしれない。

それだとなぜ、告白の返事を聞く日を今日にしたのかが分からなくなるが、告白の返答を一刻も早く聞きたかったんだろうとすこしばかり強引に納得した。

同時に自分自身にクローゼットの中を覗く行為も強引に納得させた。

（少しでもいいから最上さんのことが知りたいな）

この本心が流風の気持ちを書いたたせ、ついにクローゼットの中を覗くことを決意した。

耳を澄ま、近くに彼女がいないと判断するとゆっくりクローゼット

トまで移動する。

やはり気がひけるが彼女のことを知りたいという気持ちと好奇心が勝っていたのでおそろおそろクローゼットの戸を開けた。

僅かに開いた扉の隙間からは中を見てみるが暗く、とてもではないが何があるのかは分らない。

さらに、扉を開けるとようやく中に入っているものが分かった。

さて、唐突だがクローゼットは服を入れるためのものだ。

まあ、もしかしたら、服以外にも簡単な小物を入れてたりするかもしれないし、中には押し入れのように活用する人だっているはずだ。

つまり、クローゼットの中には服以外のものが入っている可能性があるということだ。

このように前置きするとまるでクローゼットの中には服じゃないものが入っていたように思えるがそうではない。

結論からいってクローゼットの中には服が入っていた。だが、それは服と違っていいか分からないものだった。

いや、服には間違いない。

その証拠に彼女のクローゼットの中にあつたものを着ている人を流風は何度も見たことがある。

そう考えるとこれらは間違はなく服だと流風は思い直す。

しかし、それでもクローゼットの中身が異様な物にはかわりなかった。

クローゼットの中にあつた服を思わず一つ手に取る。

それをまじまじと見つめる。

流風は思った。

これは間違いなく――

「……メイド服」

テレビ画面越しでしか見たことのない、その服はあきらかに普段着とはほど遠かった。しかも、クローゼットの中にある服は全てが今のメイド服のように普段着ではどんなにセンスが悪くても絶対に選ぶはずがないものばかりだ。

次に流風が手に取った服は女性用の警察服。ご丁寧に帽子もある。その次はナース服。現実にはいないが男達がナースに対して所望すること間違いなしのミニスカートタイプのものだった。

女用ミニスカート軍服、着物、巫女装束、ウェイトレス、セーラー服……とあるにはあるが流風の彼女に対するイメージを大気圏外までぶっ飛ばす勢いのものばかりが出てきた。

一通り見たところで流風は一つ答えに達した。

「……最上さんは……仮装マニアだったんだ」

古くさい言葉で表現する流風。

今どきは、仮装マニアのことをコスプレイヤーというのだがそういった知識を彼は持ち合わせていない。

あの冷静沈着、いつも周りには無表情で対応する最上百合がコスプレ好きという驚愕の事実を知ってしまったという感じになる流風。とりあえず、落ち着いて冷静になろう。

そう思い心の高ぶりがおさまるのを待ちながら再び服に目を向ける。

すると、何か不自然なことに気づいた。

クローゼットの中にコスプレ衣装が入っていたというのも充分おかしいことだが、それとは違う何か服についての根本的なところがおかしいと思い始めていた。
服と当然着るものだ。

それにしてもあまりにそれらの服は綺麗すぎていた。
服を大事に扱っているとかあまり着ていないとかそういう風ではない。

まるで、新品で買ったゲームをやらないどころか包装した状態のまま保管しているかのようだった。

買ったばかりといえは説明はつくが、全ての服がそのような状態だったのでそれもまずないだろう。

考えがまとまらず、困った流風は一度クローゼットを閉じて最初のように床に座った。

（外見は普通なだけだな……）

クローゼットの中には驚いたが部屋の中、事態にはとくにおかしいところはない。

そう思いながら部屋に入ってきた時、同様見渡す。

やはり、クローゼット以外特に変わったものはない。

そう、見れば見るほどこの部屋は

——明らかにおかしかった。

クローゼットの中を見て、彼女の部屋について不振に思わなかったらこのおかしさに気づくことはなかっただろう。

第一に目に止まったのは机に置かれている教科書。

教科書事態には何もおかしいところがないごく一般的なものだ。ただ一つ気になるのはなぜ中学生の時のものしかないかということだ。

勉強道具を学校に置いていたとも考えられるがそれをふまえても机の周り高校生用の勉強道具がないことはあきらかにおかしかった。

第二にこの部屋から生活感といったものが感じられなかった。生活上使用するものは置いてあるが使用された形跡が一切見受けられない。

あまりに家具の配置が綺麗すぎた。

綺麗好きという言葉では表せないほどで、あえていうなら形だけ整えているといった感じだった。

目覚まし時計、ティッシュ箱、机、ぬいぐるみ、ゴミ箱といった家具に使われたような感じがしないのだ。

まるで、指示に従って命令された配置についた兵士のように錯覚するぐらいだった。

よく見るとゴミ箱には一つだけでゴミがある。

それはティッシュ箱の蓋だった。

しかし、ティッシュ事態は一枚も捨てられてなかった。

一瞬、流風の頭にちよつとした考えが浮かんだがそれはないと思うの中から追い出した。

たまたま、ティッシュを使っただけかもしれないし、使うときに備えて蓋を取った状態で部屋に置いただけかもしれない。

それでも、流風の胸に込み上げるこの部屋に対しての不快感はどんどん高まっていった。

（最上さんまだかな……）

彼女が来て、この部屋のことを説明してくれれば胸の中で渦巻いている正体不明の違和感はなくなるはずだ。

流風はそう思いながらひたすら彼女を待った。

（僕は考えすぎているんだ……第一最上さんの部屋に不快感を感じるなんて失礼じゃないか）

不快感だけではなく、自己嫌悪の思いも込み上げてくる。

すがるような思いで鍵のない簡単な作りの部屋の扉を見ていると。

何かが頭にひっかった。

大事なことを見落としていると直感と脳の両方が訴えかけてくる。さすがに無視できず必死に脳を働かせ、思考を巡らせる。

（僕は何かを見落としている？）

根拠はないがそれはこの不快感を裏づけるもののような気がしてならない。

それは何か？

考えても考えても分からない。

（確か推理小説とかだと『矛盾』しているところを見つけて解決に導くんだよね……）

おかしいところを見つけるのではなく、矛盾しているところを見つける。

考え方を変えて再び脳を働かせ、思考する。

だが、それでも答えは見つからない。

この部屋で矛盾しているところなんて一つも――

この部屋。

その言葉が頭に浮かんだ瞬間、見落としている点があることに気づいた。

自分はさっきからこの部屋に絞って矛盾しているところを模索していた。

だが、もしも矛盾しているところがこの部屋の中になかったら？
そう思った瞬間、流風はこの部屋に入る直前のことを思い出した。

部屋に入る直前、確か彼女は部屋の鍵を開けた。

おかしすぎる。

彼女の家（高層マンションの一室ともいうが流風がいる部屋と混ざってややこしくなるのでここでは家と表記するとして）の中とはいえ、鍵つきのドアがあってもおかしくはない。

だが、それなら、鍵は部屋の内側につけるはずだ。

外側から鍵をつけるのに意味はない。

もしかしたら、内側と外側に鍵穴があるタイプの扉かもしれない。しかし、そうではない証拠を先ほど流風は見ていた。

不快感と自己嫌悪心が胸に渦巻いていた少し前、自分はまだかまだかと扉を見つめながら彼女を待っていた。その時見た扉は『鍵がない簡易的』なものだった。

つまり、内側には鍵がないのだ。

外側にはあるというのに。

答えにたどり着いた。

だが、ますます分からなくなった。

そんなことをするのに何の意味もない。

外側には鍵があるのに内側には鍵がない理由なんて精々、業者の設計ミスぐらいだ。

納得がいけないがクローゼットの中を勝手に見た時と同じく自分を強引に納得させようとするが、寸前のところで思いとどまる。

（もし……もし、仮に扉の外側の部分にだけ鍵をつける明確な理由や意味があるとする……）

たまたま、彼は仮定の答えを思いついた。

それは本当にたまたま思いついた仮定の答えなので正解している自信や根拠もないのだが。

（そうだ……例えば、この部屋に誰かを閉じ込めたりするなら――
↓

思った瞬間、彼は扉までの短い距離を全力で走っていた。

当然、ドアに体がぶつかるがそんなことは一切気にせずドアノブを手で掴み部屋から出ようとする。

しかし、無慈悲にも彼の出した答えを裏づけるかのようにドアノブは動かない。

間違いなく外側から鍵を閉められていた。

彼はこの瞬間、自分が彼女に監禁されたことを悟った。

第七話 最上百合とゲルマイン（後書き）

色々と全力で書きました。

感想やご意見をお待ちしています。

サブタイトルも長ければ、本編も今回は長かったですね……

第八話 最上百合とゲルマイン 2（前書き）

二日続けて連続投稿。

サブタイトルの『ゲルマイン』の意味にはお気づきでしょうか？

まあ、大体わかりますよね。

では、どうぞ。

第八話 最上百合とゲルマイン 2

「今日はなんだか風が強いな」

要塞都市中央地区のとある公園。

その清掃員が何ともなしに呟いた言葉だった。

彼は今日の朝早くから公園内を掃除していたのだが同じく朝早くから吹いている突風がゴミや落ち葉などを運んで来るせいで中々掃除がはかどらないでいた。

すると、近くにいた仕事仲間がよってきた。

「おい、今日は早く切り上げようぜ。この風のせいで電車も遅れているらしいぜ」

「そうだな。今日やるより明日やったほうがいいな」

そう言つて掃除用具の片付けをしようとするや唐突に後ろから声をかけられた。

「すみません。今、お忙しいですか？」

振りかえるとそこには二人の金髪の女子学生が立っていた。

一人がセーラー服でツインテール、もう一人がブレザー服で長髪という出で立ちだ。

「ん？君たち何かようかな？」

「私達ホルダーなんですけど今、ちょっと聞きたいことがあって」

その質問にブレザー服の少女が答えた。

「君たちホルダーなの？ 学生でも慣れるって聞いたことはあるけど本当だったのかぁ」

「あ、はい。能力保有者で推薦か試験を受けた人なら学生でもなれるんです」

なにやらほのぼのとした会話をする初対面の二人だがセーラー服の少女が二人の間に割って入り会話を止めさせた。

「ちょっと七海！ そうやっていつものように日常ほのぼの会話をしないでよね、今私達は調査中なのよ！」

「でも花村さん、民間の人にホルダーの活動を知ってもらうためにも交流は必要だと思っつよ？」

「……それも、いつものように言ってるわよね！？」

まったく腕を組ながら言うが本当に怒っている風ではない。二人にこのやりとりは日常茶飯事なのだ。

「……すみません、話がそれました。私達は今、要塞内で発生している殺人事件について調べているんですが……」

花村と呼ばれた少女が清掃員二人への聞き込みをしているので、やる事がなくなった七海が何気なく公園の外を見ると一人の少女が歩いていた。

（あれは……最上さん？　なんでここにいるんだろ？）

歩いていたのは彼女と同じブレザー服を着た少女、最上百合だった。

七海と最上は同じ高校に通っているうえ、クラスも一緒なので何度も話したことがある。

実はというと七海は最上のことを気にかけていた。

誰かに虐められているわけでもなければ、虐めをしているわけでもない。

特に性格面にも問題はないのだがなぜか、クラスから孤立しがちである。

孤立といっても話す相手がいないとかクラスメイトと関わろうとしないわけでもない。

実際、彼女はクラスメイトと挨拶を交わしたり、何かの話題について話し合っていたりもする。

他人と一定の距離をとりたがっているわけでもない。

むしろ彼女は意外と自分に話しかけたりしてくる人にとて丁寧な対応する細かい気配りができる、人から好かれるタイプの人間だ。それでも彼女と一緒によく行動する人物はいない。

その原因はおそらく、いつも無表情に近い顔をしていることだろう。

クラスメイト全員が先生の一言で笑ったとき、彼女だけが笑わないのはもはや恒例のことで、いつでも冷静沈着なのだ。

七海はそんな最上を心配していたのだが――

視界に映る最上百合は顔を赤らめ、つり目をたれ目にし、微笑みながら歩いていた。

「え……あれ……最上……さん……じゃないの……？」

言葉がとぎれとぎれになりながらしか出ない。

自分は何か夢を見ているのか？

いや、もしかしたら幻覚を見せる能力保有者がいるのかもしれない！？

そんな思いが何度も胸をよぎるが夢や幻覚にしてはあまりにその光景は現実味を帯びていた。

今、見たものがどうしても信じられずもう一度、確認する。

視線の先にいるのは自分と同じ要塞中央地区第二高校に通う少女最上百合でなにやら、うつとりとしたような表情を浮かべ幸せそうに道を歩いている。

——やっぱり、これは現実じゃない。

結果、七海はそう判断した。

かなりの現実味があるが所詮は夢か幻覚。 なら、現実に戻る方法があるはず。

現実に戻る方法を思案した七海は、やがてある方法を思いついたのでさっそく実行することにした。

「……ねえ、花村ちゃん？」

「——ですか。ありがとうございます。……七海、どうかしたの？」

聞き込みを終えた花村が七海に呼ばれたので振り向くと。

直後、胸を揉まれた。

直後、七海は花村の右ストレートでぶっ飛ばされた。

二つの意味で赤く染まる両者。

先に口を開いたのは花村のほうだった。

「七海！　なにをするのよ！」

花村の右ストレートによって地面に叩きつけられた七海は鼻血を出しながら答えた。

「いや……やったことは謝るけどやりすぎじゃない？」

「あんたが肉体を回復する能力保有者じゃなかったらやってないわよ！」

顔を真っ赤にしながら言い放つ花村。

それを見ながら七海は鼻に手のひらを当てる。

「まっ、それもそうだよね」

手のひらをどかすと鼻血の残りこそあるものの鼻血事態は止まっていた。

能力保有者はまるで別の世界の法則をこの世界に持ってきたかのように自分だけの能力を行使することができる。

能力には科学的に説明できるものもあればまったくできないものもある。

どちらにせよ普通の人間には使えないのでその希少さと珍しさから近年、世界各地で研究が行われている。

彼女達二人もその能力保有者である。

「……で、結局、なんで胸触ったわけ？」

「目の前のことが信じられなくて……夢だっという証拠がほしかったの……」

「絶対に他の方法あったでしょ！」

「これが夢ならきつと花村はその後、爆発するはずだったのに……」

「私の胸は爆弾じゃないわよ！」

三流漫才のようなやりとりをした後、花村はため息をつき、七海に気になったことを聞いた。

「で？ 何が夢だと思ったの？」

「あ！それなんだけど……」

七海は思い出したかのように言った。

「あの最上さんが顔を赤らめて、笑いながらそこを歩いていたんだよ！」

「それは間違いなく寝不足による幻覚ね」

きっぱりと断言する花村。

「最上つて、最上百合のことでしょう。絶対にないわね」

花村と最上は数回ほど会ったことがある。その数回でも最上百合という人間がいかに冷静沈着、無表情、無感情かが分かるのだ。

ちなみに、花村という人間も数回会っただけでいかに激情的な性格をしているかが分かる。

「まっ、あんたが寝不足気味なのは分かったから近くの支部に行つて一休みしましょう」

「寝不足じゃないのに……でも、今は十一時半だし、ちょうどいい時間帯だね」

二人は知らない。

今、要塞内では連続殺人とは別の事件が発生していることを。

そして、その事件の被害者は二人が追っている殺人犯だということ
とを……

第八話 最上百合とゲルマイン 2（後書き）

感想やご意見をお待ちしています。

それにしてもヒロインに監禁される主人公って前代未聞ですよね？

第九話 最上百合とゲルマイン 3 (前書き)

特に何にも書くことがない……

しいていうなら、今回で十回目の投稿です。

では、どうぞ。

第九話 最上百合とゲルマイン 3

七海が公園で最上百合を目撃した頃、その最上百合に監禁されてしまった少年、蓮見流風は脱出の方法を試行錯誤していた。

「最上さん！ いるなら、返事してください！」

先ほどからこの言葉を何度も扉の向こうに向かって言い続けるが何の反応もない。

（もしかして、外出したのかも……）

無視というのも考えられるが、この可能性もなくはないと流風は思った。

結局のところ、この考えは正しいのだが流風には正しいかどうかは判断できなかった。

（……どうして、最上さんは僕を監禁したんだろう？）

彼女が外にしようが中にしようが返事がかえってこないのにはかわりないので流風は自分が監禁された理由について考えることにした。

——僕は最上さんを悲しませたり、恨まれたりすることをしたのかもしれない……

——でも、そんなことに心当たりはない

——だけど、気づかないうちに最上さんを傷つけたのかも……

思いやりの心が強い流風は最上に非があるのではなく、次第に自分が悪いのではないかという自己嫌悪心にからはじめていた。だが、それだと一つ矛盾することがある。

——でも、最上さんは僕のことを好きって言った……

告白とは当然のことながら好きな相手に自分が好きという思いを伝えることだ。

もし、彼女が本当に流風を憎んでいるのなら告白なんてしないはずだ。

ここに監禁するための偽の告白だったとしても、復讐の方法が他にあるはずだ。

むしろ、自宅に監禁なんて方法は手間や負担がかかりすぎる。

考えれば考えるほどわけが分からなくなる。

思わず天を仰ぐが見上げた先には空はなく、木製の天井があるだけだ。

（……最上さんがいたずら好きで僕をからかっているのかならいいのに……）

僅かな願望を抱きながら窓の外を見る。

外は突風が吹いていて、木々や葉などが大きく揺れている。

それでも、出歩けないほどではないので外を見れば歩いている人

は何人かいる。

窓を開けて、助けを呼ぶことも考えたが鍵を開けたはずなのに、どれほど力を込めても窓が開かないので仕方なく諦めた。

おそらく、この窓にも部屋の扉と同じように普通とは違うような仕掛けが施されているのだろう。

携帯電話で助けを呼ぶことも当然考えたがそれはできなかった。

玄関から家入った直後、彼女が。

「そこに充電器があるから充電する？」

と自分が断るのをたしなめ、ほぼ強引にリビングで充電させたので今、手元には携帯電話がないのだ。

自力での脱出方法がほぼ不可能となってしまった流風はため息をつきながら周囲を見渡す。

部屋には彼女が生活していたような形跡がなく、生活感を捏造したかのような家具が置かれているだけだ。

まだ、監禁されたことに気づかなかった時に彼の頭に一瞬よぎった考え――

――「ここは、本当に彼女の部屋なのか？」

というのが段々、現実味を帯びてきた。

そのことに恐怖を覚えていると唐突に自分が空腹だということに気づいた。

（あつ、今、お昼時なんだ）

壁にかかっている時計を見て、その事に気づく。
監禁されたことに気がいきすぎて昼食のことをすっかり忘れていたようだ。

最も、昼食など用意はしていないのだが――

（……そういえば、その戸棚にあるお菓子食べていいんだっけ）

彼女が部屋を出る直前に言ったことを思い出しながら、戸棚に近づく。

そこには、流風も知っている極めて一般的なお菓子の袋が三つほど置いてあった。

そこから、適当に一袋選び、袋を開ける。とにかく、今の自分には彼女の何らかの行動を待つしかないのだとお菓子でも食べて、昼食にしようと流風は思っていた。

（それにしても、このお菓子食べるの久しぶりだな……最後に食べたのは半年くらい前だっけ？）

そんな、今の状況に似合わないことを思いながら、右手を袋の中に入れる。

すると、袋の中で手のひらに何かが刺さったかのような感覚が駆け抜けた。

刺さったといっても痛みなどほほないも同然だった。
いくなれば、松の葉を一枚だけ取り、手に軽く押しつけたような

感じだった。

流風はお菓子に尖った部分が手のひらに触れたんだろと思い、袋の中からお菓子ごと手をぬこうとすると。

しかし、なぜか手は抜けない。

不思議に思っていると、ふと違和感を感じた。

手先の感覚がなくなっている。

最初は気のせいかと思った。

そして、実際にそれは気のせいだった。

ちゃんとお菓子に触れている感触があるし、袋に触れている実感もある。

正しくは右手が痺れてきていた。

指先から始まった痺れはどんどん広まっていく。

流風がそのことに気づいた時には既に右肩にまで痺れ、というよりは体を動かせなくなる麻痺が到達していた。

気が動転した流風はあわてて、お菓子の袋を手放し、右手を確認する。

特に変わったところではなかったが右腕は完全に自分の意志では動かせなくなっていた。あえて、変わったところがあるとなると、右手の平によく見ないと分からないほどの針で刺したような小さな傷があるぐらいだった。

一滴ほどの血が滲み出てるがこの状況でなければ、まったく気にしていなかっただろう。

右腕が麻痺した原因は間違いなく、この傷だと考えた流風は徐々に体全体を蝕んでくる麻痺に耐えながら自分が手放した袋の中身を調べようとする。

が。

直後、自分の首もとに何かが刺さった。

やはり、それには痛みがまったくなく、刺されたということに流風は気づけない。

かわりに睡魔が自分のことを襲ってきた。眠くなつて寝るということではない、強制的に相手を夢の世界に引きずりこむような感じだった。

激しい睡魔に襲われながらも、自分を襲った相手を見るために振り返ろうとするがちょうど、麻痺が体全体に行き渡り、自分の意志では体を動かせない。

そして、そのまま床にうつぶせの状態になるような感じで倒れこんだ。

薄れゆく意識の中、耳にしたのは。

「流風君……大好き……」

という、悪意も敵意もなければ、悔恨の年や憎しみも込められていない、純粹な蓮見流風に対する愛の言葉だった。

第九話 最上百合とゲルマイン 3（後書き）

感想やご意見をお待ちしています。

多分この監禁シリーズは十回ぐらいの話を使うかも……

第十話 最上百合とゲルマイン 4（前書き）

なんか色々とすごい展開……

できればポイントやご感想をください。

では、どうぞ。

第十話 最上百合とゲルマイン 4

目が覚めると僅かな違和感を感じた。

それが何なのか分からず、まどろみに身をまかせ二度寝しようとするが急に意識が鮮明になった。

違和感の正体は、まず、布団の感触が違うことだった。

自分の部屋のベッドはこんなに寝心地がよくないはずだ。

そして、鼻孔を突き抜ける甘い匂いと視界に映る光景がここは自分の部屋ではないということを語っていた。

頭の中にもやのようなものがかり、うまく思考することができなかったが、次第に意識を失う前のことを思いだし始めていた。

（そうだ……僕は、最上さんの家に来て……監禁されたんだ）

そう思いながら体を起こそうとするが指がほんの少し動くくらいでとても、体を動かすほどの力は出せなかった。

拘束されているのかと思い、自分の体を確認する。

枕に頭を乗せていたので首を動かさなくても体の様子を見ることができた。

体を見た瞬間、流風は硬直した。

体ではなく、心が。

流風の体は、拘束されたわけでも、血だらけにされたわけでも、骨を折られたわけでもなかった。

だが、目の前の光景がとても信じられなかった。

体に損傷はないし、乱暴に扱われた形跡もなかった。
ただ――

自分が着ている服が、百合の部屋のクローゼットに入っていたものと同じになっていた。

予想外の事態の連続に混乱し、満足な思考ができなくなりつつある流風はもはや困惑することしかできない。
自分はどれくらいの間、眠っていたのか？
なぜ、最上百合は自分を監禁したのか？

どうして、体が麻痺して動けなくなっているのか？

どういう理由で自分は今、女物の服を着ているのか？

困惑するだけでは駄目だと必死に言い聞かせるがやはり、頭は働かない。

脳にも麻痺が及んでいるのではないかとすら錯覚してしまう。
その時、狼狽する流風に向かって声が投げかけられた。

「流風君。起きたの？」

声の主は視界のはしに映る少女、最上百合のものだった。
いつも通りの無表情なのだが口元にはうっすらとだが笑みが浮かんでいる。

「……………う……………あ……………」

視界の中央に向かって移動してくる彼女に話しかけようとしたが舌先にまで麻痺が浸透していて、まともな言葉が出せない。

「ふふっ。どうやら麻酔はしっかり効いてるようですね。心配しなくても数時間ほどで効果はきれますよ」

先ほどとは違う、まるで年上や仕事の上司に話すかのような言い方だった。

だが、壁を作っているかのような様子はなく、むしろ深い愛情を孕んでいるかのようなだった。

そこにとてつもない恐怖を感じたが、彼女はそれを知ってか、知らずか分からないがゆっくりと自分に近づいてきた。

なんとか、彼女と意志疎通を図ろうとするが方法は思いつかない。その間にも彼女は流風との距離を詰めた。

そして、ベッドの手前まで来るとゆっくりとベッドの上に乗った。そのまま、変わらない速度で移動し、馬乗りの形で流風のお腹の部分に座った。

両足がベッドについているので重さはあまり感じない。

だが、百合のお尻の部分が流風のお腹の部分に当たり、恥ずかしくなった流風は思わず顔を赤らめてしまった。

「顔をトマトのようにして……本当に流風君は可愛いですね」

丁寧な敬語で自分がした反応を指摘され、羞恥心が高まる。

さらに、顔を赤くする流風を見て、百合は両手を顔に当て自分の顔も同様に赤らめながら独り言のように言った。

「ああ……流風君……その恥ずかしがる姿がとても可愛い……」

普段の彼女からは想像もつかないことを言いながら手を伸ばし、流風の顔を撫でる。

「赤ちゃんみたいなお肌ね。全然毛もはえてないし、本当に女の子みたい」

今度は子供を諭すかのような言い方で流風に話しかける。

流風は自分のコンプレックスを指摘され、さらに顔を赤くする。

同年代の男子より低い身長に女の子に見間違えるような顔。

体にはまったくといっていいほど毛がはえてない。

そんな流風は今、体の自由を奪われ、無理矢理女装され、女の子みたいというコンプレックスを徹底的に刺激されている。

自尊心とプライドはナイフでえぐったかのように傷つき人としての尊厳が奪われてしまったかのように錯覚した。

温厚で少し気弱な性格の彼は彼女の言葉に翻弄されるがまだだった。

（駄目……それ以上言わないで……）

反論することも叶わず、気づいた時には、うつすらと目じりに涙を浮かべていた。

女性に男性が泣かされるという情けなさに何倍にも膨らんだ羞恥

心が流風の心を追い詰め、彼女に抵抗する力を削いでいった。

そして、彼の泣き顔は百合をさらに興奮させるスパイスとなっていた。

悲壮感溢れる流風の顔を見て、百合はとても嬉しそうな狂喜の笑みを浮かべ、さらに彼の心を追い詰めるべく、耳元に顔を近づけ彼の抵抗力を完全に奪うであろう言葉を優しく、静かに、言い放った。

「もう、流風君は私もの。だから、この先、私抜きじゃ絶対に生きていけなくなるよう心が完全に私に掌握されるまでずっとこのベッドに縛りつけてさしあげますね」

私語と敬語が入り混じったその言葉を聞いた瞬間、流風の心は絶望の闇に突き落とされた。

一切の抵抗もできない流風にその言葉は深く突き刺さった。
ずっと。

それが具体的にどれくらい間なのかは分からないが遠からず自分の身も心も彼女の所有物になってしまふという確信めいたものがあった。

自分は彼女の拷問じみた征服欲に耐えきることができない。
必ず屈伏する。

先ほどの前戯にすぎない言葉による凌辱にでさえ自分は憔悴しきり心を崩壊寸前まで追い詰められたのだ。

彼女が本腰を入れ、自分を籠絡しにかかったらひとたまりもないだろう。

これから自分に襲いかかるであろう未来を予想し、心が震えているのが分かる。

そのような考えをすることでさえ許さないと言わんばかりに恐怖に必死に耐えようとする流風の胸元に手が伸ばされた。

驚く間もなく、服のボタンを外され、胸元の素肌を露にされてしまった。

胸元がない子供のような胸板を愛おしげに見つめながら百合はゆつくりと指を胸板におき、そのまま滑らせるように動かした。

「……あ……あぁ」

（駄目え……お願いだから、指動かさないで……）

胸板を滑るように移動する彼女の指に体がくすぐったさと恥ずかしさから我慢しても耐えられず反応してしまう。

声を何とか押し留めようとするが願い虚しく口からうめき声が出てしまう。

心の中で彼女が指を動かすことを止めるように懇願するが、その思いを嘲笑うかのように彼女は再び流風を辱める言葉を紡いだ。

「ふふっ、胸弄られるのがそんなに気持ちいいんですか？ やっぱり流風君は……いえ、流風ちゃんとは可愛い女の子なんですネ。それ以前に私に束縛された状態なのにここまで反応するなんてよっぽど感度がいいんですね……もしかして、マゾの変態なんですか？」

的確に流風の心と精神を追い詰める優しく、穏やかな言葉は確実に彼を蝕んでいった。

どこまでも純粋な歪んだ愛情からくるその行為は彼女の気が済むまですつと続けられた。

その最中、やっと流風はなぜ彼女が自分を監禁したのか分かった。彼女は自分を恨んでいたわけでもなければ、憎んでいたわけでもない。

むしろ、その逆。

彼女は自分を深く深く愛している。これ以上がないほど愛している。

だから、いや、だからこそ彼女はこのような狂信的な行為に及んだのだ。

常識も何も通じない。

自分を——蓮見流風を永遠に最上百合というから離れさせないようにするため。

彼女は自分を監禁した。

第十話 最上百合とゲルマイン 4（後書き）

ご意見や感想をお待ちしています。

次回、ついに裏人格登場！（前にちよつと出たけど）
では、また次回。

第十一話 二重人格（前書き）

今回、初めて魔王（裏人格）が話します。
では、どうぞ。

第十一話 二重人格

（これから僕はどうなるんだろう……）

百合が出ていった部屋に放置された流風はベッドの上で体を満足に動かすこともできないまま自分の今後について考えていた。

彼女は自分を決して殺しはしないだろう。

だが、今までの自分の人格、良識、性格、などのありとあらゆる概念を徹底的に破壊しにくるだろう。

彼女のどこまでも純粹で偏執的な歪んだ愛は彼の絶対的な服従と支配を望んでいる。

そのためなら彼女は手段を選ばないだろう。

その方法を考えただけでも震えが止まらなくなる。

何とかここから抜け出したいがそれは叶わないだろう。

正体不明の謎の麻痺は彼女の言う通り数時間経過した後には消えたが効力が残っている間にベッドの上に両手両足わ直接ロープで縛り付けられ身動きができないようにされていた。

関節の部分には神経が集中しているので、そこを縛ると後遺症になることがあるらしいので彼女はそこは縛らなかった。

だが、それでも脱出がほぼ不可能ということにはかわりなかった。手足を動かそうと試みるががちりと固定されているため、僅かにも動かない。

自分が情けなく拘束されている姿を見るたびに心が悲鳴を上げるのを自覚してしまう。

この部屋に放置されてから数時間経ち、窓の外では日が落ちはじめていた。

何の前触れもなく非日常に足を踏み入れてしまった彼は毎日をご

く普通のありふれた日常で暮らしていたこともあり、そういつたことに対する耐性がまっただくなかったため今にも我慢の限界点を超え彼女に屈しそうになっていた。

何のデザインも装飾も施されていないありがちな天井を悲しげな目で見つめながら自分の行く先について考えた。

（こういうのが洗脳って言うんだろ……きっと、もう二度と自分の意思で行動することができなくなるんだ……いつそのこと今すぐにでも降参した方が楽になれるのかな……）

諦めといっても過言ではない考えが頭によぎり意識が暗転しそうになった。

——瞬間、右手の平に何かに触れた感触が走った。

いや、正確には触れている。今、自分はこの感覚の根源に触れ続けている。

先ほどの体が麻痺する何かかと思ったがそれは違う。少し経ったが体の調子はどこもおかしくなっていなかった。

感覚の正体が気になり、顔を右に傾ける。

すると、そこには直方体の物体があった。

自分の手のひらから、ほんの少しだけはみ出すくらいの大きさでライターを連想させるような形をしていた。

鉄製の表面上にはきめ細かく美しいデザインが彫られている。

よく見れば、それは幻想的な雰囲気漂う果樹園だった。

果樹園の絵が彫られた直方体。

何とも不思議なものだったが初見のはずなのになぜか見覚えがあるかのように思えた。

しかも、手触りがうっとりするほどよく、まるで自分専用に作られたかのように丁度いいサイズだった。

それを流風は魅入られたかのように手で弄り、何度も見つめてしまつた。

いきなり、自分の手のひらに現れたという事実がどうでもよくなるほどの魔性の魅力をその直方体は持っていた。

（何だろう……これは僕の物じゃないのに、僕のもののような気がする）

自分の考えが矛盾していることに気づきつつもその考えを捨てることができない。

さらにそれを手のひらで調べていると

フンツと空気を切り裂くかのような音が直方体から聞こえた。

驚いて、直方体を見てみると先端部分から一筋の刀が飛び出していた。

その瞬間、この直方体の正体が分かった。これはナイフだ。

しかも、ただのナイフではない。

俗にいう仕込みナイフというものだ。

刃を柄の中に収納して、使用する時のみの中から刃を取り出す、携帯と持ち運びが便利なものだ。

直方体の正体に驚く最中、流風はとても当たり前なことに気づい

た。

——このナイフを使えばロープを切断できるのではないか？

そう思うやいなや、ナイフを持った方の手首の角度を上げ、右手を縛るロープとナイフが接触するように調節する。

ギリギリ刃先がロープに当たることが分かると拘束されている状態で出せる精一杯の力を右手に込める。

その力はナイフに伝わり、流風を拘束するロープを切断しようとする。

やがて、ロープに切れ目ができた。

それを確認するとナイフの柄を力強く握りしめ、右手を先ほどと同じく暴れさせる。

すると、切れ目を入れる前とはうってかわり、あっさりとロープを引きちぎることができた。

後は自由になった右手でナイフを握り、左腕、両足のロープも次々に切断する。

気づけば流風の体の自由を束縛するものは何もなくなっていた。

（ぬ、抜け出せた！）

歓喜の思いが溢れ出してくるがそれに浸っている暇はない。

早くここから抜け出さないと最上がここに帰って来てしまう。

そうなる前にこの家を抜け出さないといけない。

考えを整理しながら流風はベッドから出ようとする。

が。

唐突に首筋に何かを打ち込まれた。

（！？ この感覚は……あの時の！）

それはお菓子の袋に手を入れ、体が麻痺した時とまったく同じ感覚だった。

だが、今のはそれとは違い、麻痺するだけではなく、意識が朦朧としてきていた。

（これは……確か体が麻痺した時、急に最上さんに後ろから襲われた時と同じ……）

何とか意識をつなぎ止めようとするが前と同じで抵抗する間もなく、目の前が暗転した。

＊

「無駄ですよ流風様。その部屋から抜け出そうなんて」

自分への反逆を企てられたというのに彼女の表情には怒りが無い。むしろ、喜んでいるようにも見える。

最上百合は本当の自分の部屋で流風専用の監禁・拷問部屋の様子をある方法で監視していた。

倒れこんだ流風を見ながら微笑み、独り言を呟く。

「まさか、仕込みナイフを隠していたなんて一体どこに……まあ、没収するし、どのみち部屋には鍵がかかっているから大丈夫……それよりも……」

そこで、一呼吸とり、今にもとろけそうな表情をしながら顔を赤らめ続きの言葉を紡ぐ。

「私に逆らったからには厳しい厳しいお仕置きをしないとイケませんね。流風様には私の方が立場が上だということを徹底的に教え込まないといけませんね……」

監禁相手を敬語、様づけで呼ぶ彼女にはまさしく『狂喜』という言葉が似合っていた。彼女は微笑みを深くしながら続ける。

「私の『ゲルマイン』で流風様を徹底的に調教、洗脳、支配させてあげますね」

彼女は本当に幸せそうだった。

*

部屋の中で流風は意識を失い、倒れこんでいた。

部屋では時計の針が動く音しか聞こえず、それ以外は静寂だった。

だが、物音がした。

そこには気を失ったはずの流風が起き上がろうとしていた。
右手に仕込みナイフを握り。

やがて、ゆっくりと立ち上がると一言呟いた。

「……強制的に出てこさせられたということはよほどのことだと思っただけ……」

仕込みナイフを右手から利き手の左手に持ちかえる。

「なんで、女の子の部屋にいるのかな？」

とても不思議そうに言った。
左手のナイフを眺めながら。

そして、気を失う前の蓮見流風と最上百合は知らない。

このナイフがこの要塞都市の連続殺人事件で使われた物と同一であることを。

第十一話 二重人格（後書き）

感想やご意見をお待ちしています。

……ポイントも

では、また次回。

第十二話 百合対流風（前書き）

だんだん話が進んで来ました。

ポイントやアクセス数も増えて嬉しいですが、どうぞ。

第十二話 百合対流風

（なるほど……そういうことか）

気を失ったはずの少年、蓮見流風はしっかりと意識を保ち、今までのことを振り返っていた。

正確には自分の記憶ではなく、もう一人の自分の記憶だが。

（へえ……流風ってば、あの百合さんに告白されたんだ……）

内心、もう一人の自分を褒めながら薄く笑う。

その笑いは純真なもう一人の自分のものでもなければ、百合のよきな狂喜に満ちあふれた笑みでもなかった。

その笑みに何が孕まれているかは分からない。

ただ、その笑みからは見る人に安心感を与え、敵対心を失わせる、優しく穏やかなものが感じられた。

（……で、百合さんに監禁されたってわけか……）

記憶の閲覧を終え、もう一人の流風は率直な感想を持った。

（よかったじゃないか流風。百合さんはとても献身的で純粋に君のことを愛してくれるよ）

その感想の中身は祝福だった。

偽りでもからかいでもない、心の奥底からの喜びが含まれていた。

「まあ、とにかく——」

笑いを絶やさず振り向く。

「これ、邪魔だから外しますね」

——刹那、自分の首にナイフを突き刺した。

いや、よく見るとナイフはギリギリ首には刺さってなかった。
代わりに違うものが刺さっていた。

それは、何と表現すればいいか分からないものだった。
薄い水色し、グネグネと動き回る不定形の半固体状のものであつた。

ナイフに刺さりながらも動き回るそれを気味悪がることもなくナイフに突き刺したまま自分の目の前に移動させ、じつくりと観察する。

それも、可愛い小動物を愛でるかのよう。

怯えることもなく、指で触ると少し冷たいことが分かる。大体、水道水ぐらいの温度だった。

「これ、生物じゃないのかな？　もしかして、百合さんの保有能力？」

独り言のように推測を口に出しながら観察を続ける。

「なるほど、これを使って相手を麻痺させたんだね。それにしてもこれ、ぷにぷにしている手触りがいいね。性質と合わせるとクラゲみたいだね」

微笑みを絶やさず、さらに言葉を紡ぐ。

そこには彼女やこの不定形の物質に対する恐怖や侮蔑は一切含まれていない。

ここまでくると逆に彼を見る人が戦慄を覚えるぐらいだ。

そして、彼を見る人物が一人その場、いや、その場を見ていた。

*

「そ、そんな……」

最上百合は驚愕していた。

遠隔で自分の能力『ゲルマイン』を操っていたが想定外すぎる事態が発生した。

まず、ゲルマインの能力で気を失わなせたはずの流風が意識をすぐに取り戻した。

驚きこそしたが特に問題はなかった。

そう、問題なのは。

なぜ、彼の首もとに潜ませていたはずのゲルマインの一部が見つかったかということだ。

ゲルマインの能力で首もとの感覚を若干ながら麻痺させ、貼りついているのをばれないようにしていた。

だが、彼は気づいた。

先ほどまでは気づく素振りさえなかったはずなのに。

しかも、今彼はそれに直接触れているのに体が麻痺していない。首もとから離れた今、直接触れるだけでも体が指一本動かなくなるほどの体液に似た液体が体に染み込んでいるにも関わらず。

本来の計画なら月曜日になるまで徹底的に彼を自尊心を破壊し、自分に完全服従するような内容の教えを叩きこみ解放するつもりだった。

もちろん、ただでは解放させない。

日曜日に彼のプライドを掌握し、自分に逆らえないようにする処置の一つである強制女装をさせた後に脅迫用と趣味を兼ねた写真を撮る予定だった。

彼に女装をさせるためだけに買い込んだあらゆるコスプレグッズを着させて、世間に出回ったら破滅すること間違いないしの写真を撮ることで他の人に他言できないようにする。当然、自分が捕まったら写真がインターネットに流出したり、要塞都市中に広まるということも教える。

そして、念には念を入れ、ゲルマインを彼に潜ませ抵抗する素振りを見せたら体が無理矢理麻痺するように仕込んだ。

後は、彼に自分が調べあげた洗脳処置のやり方を毎日行っただけだ。学生寮から彼がいなくなっても気づく人は誰もいないだろう。

なぜなら、寮に住まう費用は親元から徴収されるため、友達が遊びに来る以外の場合、この都市の学生寮の部屋を尋ねるものなどないからだ。

まあ、それでも心配だから彼に学生寮の場所を引越すと学校に申請させるよう命じるつもりでもあるが。

基本的にこの都市の学生寮に住む生徒はいつでも違う寮に移ることができるといって一種の法律があるのでそれを利用する。

そのためにわざわざ、もう一つの部屋を既に準備しているのだ。

そして、彼には学校から帰ってきたら必ず自分の洗脳処置を受けさせ、自分に対する感謝と服従の言葉を言わせる。

休日なら一日中、調教したり、一緒にどこかに遊びに行ったりして自分に依存するよう仕向ける。

他にも彼女の計画はあるが全て説明しようとするればキリがないほどだ。

ともかく、彼女の仕組んだ罠は犯罪専門家や洗脳や調教といったことに関する人から見れば舌を巻くようなものだった。

だが、僅かながらその計画に支障がきたしていた。

彼の想像もしていなかった異質さが原因だった。

だが、彼女は計画に問題が発生したにも関わらず笑みを絶やさない。

それどころかますます深くする。

「いい……いい！　そういう反抗的なところもいい！　そうやって、抵抗する流風様が私に支配されてさまうのを想像すると……ぞくぞくします」

さらに狂喜に染まる彼女は再びある方法——仕掛けた監視カメラから送られてくる映像に目を通す。

だが、彼は部屋にいなかった。

（！？）

彼を部屋に閉じ込めてから初めて動揺する百合。

部屋のどこにも彼はいない。

その答えを示すかのように部屋の扉が開いていた。

（なっ！？ 一体どうやって！）

あわてて家全域のカメラの映像を確認する。
すると彼は玄関のカメラに映っていた。

それを見て、思わず安堵する。

（よかった……念のために玄関の扉にゲルマインを設置して
よかった）

映像には半固体状の柔らかい物質に覆われた扉の前で考えごとを
する流風が映っていた。

（どうやって部屋から抜け出したかは分かりませんが、そこは無理ですよ……なにせ、ゲルマインをかなりの量くっつけているんですから）

扉はゲルマインに覆われてドアノブにまで手を伸ばすことができない。

例えば体が痺れなくても柔らかいゲルマインに押し返され、ドアノブに触れることすらできないだろう。

（流風様に私がどこにいるかを当てるのは不可能ですし、万一分かったとしてもこれませんね……なら、流風様が疲労するのを待ちましょうか）

冷静になった頭で新たに彼を追い詰める算段を考える。

それゆえに彼女は知らない。

よく彼の表情を見なかったのだ。

だから、彼女は絶対的な危機に陥っているに関わらず彼が微笑んでいることに気づかなかった。

第十二話 百合対流風（後書き）

感想やご意見をお待ちしています。

ポイントもできればお願いします。

では、また次回。

第十三話 奇襲（前書き）

投稿しました。

ここまで何とか続けられました。

これからも頑張ります。

では、どうぞ。

第十三話 奇襲

私が蓮見流風という人間を好きになったのはいつだったか？

実はというとはつきりは分らない。

その理由はきつと彼を自然と好きになったからだ。

ドラマや漫画みたいに劇的な出会いをしたわけでもなければ、何かの出来事で急速に知り合ったわけでもない。

彼との出会いは中学校の入学式で教室に行ったときだ。

クラス全員が自己紹介をする中、彼の何の変哲もない言葉を聞いて名前を知った。

私は別に孤立する原因を持っていたわけではないが人と関わる必要はないと思い友達を作ろうとしなかった。昔、一人だけ友達がい

たがその子とは数カ月ぐらい話しをしていない。

別に喧嘩をしたわけでもない。今まで友達だと思っている。

その子はこの中学校にはいないのだ。

いや、正確に言うとその世にはもういないだろう。

とにかく、私はクラスメイトとは軽く話をするだけで接点を持たなかった。

浮いているわけでもないので目立つ、私が孤立していることに気づいた生徒は誰もいなかった。

当然、彼も気づかなかった。

話がそれたが彼と初めて関わったのは確か……

まあ、無理もない。

例えば、高校生に向かって中学校時代のことを鮮明に覚えているかと聞けば、返ってくる答えは間違いなく『できない』だろう。

もし、彼との出会いが恋愛ドラマの主人公とヒロイン並みのものだったり、私が一目惚れしたとかだったら、覚えているかもしれないが、全然そうではなかった。

最大限に脳をフル活用すると彼から話しかけてきたことを思い出せる。

その記念すべき一言目は

「最上さん、こんにちは」

だったはずだ。

私は当時、彼のことを同じクラスメイトとしか認識していなかった。なので適当に返事を返していた。

あれ？ 意外と思いだせた

まあ、とにかくそんなごく普通の出会いをした私は彼と接するうちにいつのまにか好きになっていて、現在に至った。

え？ 内容を省きすぎだって。

確かに好きになっていく仮定をすつとばしてしまったわね。

まあ、その内容については追々話すとして。

彼には一つ気になるところがあった。

多分というか間違いなく、そのことに気づいているのは私だけだったはずだ。

何というか、彼には二面性のようなものがあつた。

最も今どき二面性なんてもの持っていてても不思議じゃないのだが何か引つ掛かつた。

彼は人気者になるとか人望を集めるために二面性を使つてはいなかつた。

二面性というのは片方が本当の性格だ。

ただ、彼は違つた。

どういつところが違つかというと確信を持つては言えないのだが、あえていうのなら――

――両方とも本当の性格のようだった。

*

「……それにしても、まさか、最上さんがこんなに積極的に情熱溢れる子だったなんて知らなかつたよ」

『ゲルマイン』によってロックされた玄関から一時退却した流風はリビングに来ていた。

目的はもちろん、最上百合を見つけることなのだが。

「……いない」

思わずポツリと呟いてしまった。

ここに来るまでの間に他の部屋を全て見て回ったが彼女の姿は影も形もなかった。

こうなると、この部屋のどこかに潜んでいるか、出かけているかのどちらかだろう。

どうするかと考えていると後ろで何かが動いたかのような音が聞こえた。

——瞬間、流風が部屋で捕まえたのと同じ見た目をした物体が彼目掛けて飛び掛かってきた。

——刹那、それよりも早く流風は動き、あっさりと体当たりをかわした。

そのまま、ゲル状のそれは後ろのタンスにぶつかった。

そこにヘドロのようにへばりつきながらヌルヌルとなめくじのようにつつくりと表面を滑り落ちていく。

その光景をゆつくりと眺めていたが再び、その物質がこちらに向

かつて一気に跳躍してきたので同じく体を横に移動する。

すると、また、その物質が飛びかかり……という動作が何回も繰り返される。

大した速度ではないのでいくらでもかわせるのだが

(……これを繰り返されたらそのうち体力が尽きるな)

流風は冷静に分析していた。

この単調な動作が何回も続けばゆっくりとだが、確実に体力は奪われていくだろう。

しかし、事態は流風が思っているよりも深刻なものに変化していた。

何とか打開策を考えようと攻撃をかわしながら思考を整えようとする。

その時――

*

「集中つてすればするほどその対象に何らかの形で没頭できますよね」

誰に言うわけでもない独り言を百合はまるで友人に何となく話題

を振るかのように言った。

彼女は現在、間違いなく気づかれないとふんだ、流風が今いる場所から近いところにいた。

そこで悠々とモニターを見ながら彼を仕留めにかかっていた。

監視カメラから送られてくる映像を見て、流風の動きが先ほどよりも機敏になっていることに若干驚いたが特に計画に支障はない。

どのみち、部屋からは脱出不可能で、時間が経てば自然と自分の手に落ちる。

まあ、その必要もないだろうと百合は相変わらず微笑みを浮かべながら思っていた。

「でも、集中にも欠点はあるんですよね」

先生が生徒の間違いを優しく指摘するかのように誰の耳にも入らない説明を続ける。

「そのうちの一つが“他のことに目がいなくなる”なんですよね」

さらに言葉を紡ぐ。

「例えば、部屋の全体を見るのと部屋の一点、仮に時計を見るのなら、どちらの方が広範囲を見渡せます？」

例えを使った分かりやすい説明をやはり、言い続ける。

すると、一旦、そこで声を止める。

そして、変わらぬ微笑みのまま再び口を開いた。

「つまり、今の流風様は私の能力の一部分に集中しすぎなんですよ」

モニターに映る流風が攻撃をかわす。

瞬間――

「他の部分が同時に攻撃すること……考えなかったんですか？」

残酷な解答をあかした。

その時、モニターには攻撃をかわした流風と彼の死角から新たに攻撃を繰り出した別のゲルマインが映っていた。

第十三話 奇襲（後書き）

感想やご意見をお待ちしています。

……後書きの内容があまり思いつきません。

第十四話 停滞（前書き）

長らくお待たせしました。

最近、更新していなくてすみませんでした。
では、どうぞ。

第十四話 停滞

「まっ、見え見えなんですけどね」

そう言っつて蓮見流風は死角からの攻撃を顔色一つ変えずにかわした。

——はっ？

その一言が彼女が心の中で思っつた単純な考えだった。死角からの見えない攻撃をあっさりとかわす。

簡単にできることではない。

視界外からの攻撃をかわすのにはまず、音や匂い、気配を読み取る必要がある。

だが、彼女の操る『ゲルマイン』は無臭なうえに、音をたてずに彼に襲いかかった。

加えて、ゲルマインは生命ではない。

つまり、ゲルマインには気配というものが存在しない。

ならば、どうやって彼は死角からの攻撃に気づいたのか？

考えられる方法は常軌を逸するほどの聴覚や嗅覚などの感覚器官を持つているぐらいだ。

いや、もっと単純に鏡があつたとか？

だが、彼がいる部屋には窓はあつても鏡はない。

（そんな！ 一体どうやって！？）

最上百合は今なお自分が有利な状況を保っているにも関わらず焦

りを覚え出していた。

彼女は自意識過剰でもなければ、偉ぶったり、調子に乗ることもない。

クールという言葉が人一倍似合うような少女だ。

しかし、彼女は自分の実力にある程度の自信とプライドを持っている。

自身の実力に自信とを持つのとプライドがあるのは良いことだが、彼女にはそれが精神的弱点になる時がある。

彼女はあらかじめ準備をしてから行動する。

例を挙げるならばテスト勉強は必ず誰よりも早くしっかりと行う。

そんな、彼女は想定外の事態に極端に弱い。

緻密な計画、念入りな準備、自分の実力。

それが彼女のプライドと自信の元になっている。

だが、予想だにしないこと。自分の計画への支障や予想を大きく越える出来事が起きた瞬間、彼女を支える根幹部分はあっけなく崩壊する。

そして、それが今にも始まろうとしていた。

背筋に冷たいものが走り、体に震え出す。

得体のしれない恐怖が体を包み込み、より一層と不安を煽る。

——自分は何か失敗をしたんじゃないか？

——完璧と思っていた計画に穴があったのではないか？

——このまま、体力を削る攻撃を繰り返すだけでいいのか？ さつきのは偶然でもう一回奇襲を仕掛ければ、麻痺させれるんじゃないのか？

溢れ出す考えを整理しきれず、頭がおかしくなりかけていた。
この意外とプレッシャーや虚をつく押しに弱いという弱点が彼女を攻め立てた。

だが、それで参るほど彼女は弱くなかった。
これまでの人生、想定外の出来事は当然あつたが必死に乗り越えてきた。

それは今回もだと思い新たに策を打ち出す。

＊

流風の視線先の先には執拗に自分を追い掛け回していた物質が不定形なその形を崩し、動かなくなったそれがあつた。
理由はどうあれ、ピンチをしのいだことにはかわりなかったので、ひとまず安堵する。

（さて……それで百合さんはどこにいるのかな？）

やはり、本体の彼女を叩くのが一番の有効手段だと考え、彼は思案する。

まず、この物体は正確というほどでもないが自分のことを認識して襲いかかってきた。

だが、あれは間違いなく彼女の能力であつて生命ではない。
物体の構造を確認した流風は確信する。
ならば、考えられることは二つ。

一．あの物体は何かに反応して攻撃をする。

一．百合本人が何らかの方法で自分の位置を特定して物体に指示を出している。

前者の方だとするとその反応するものはたくさんある。

音、熱、匂い、動きなど様々だ。

後者の方だとすると彼女にはこちらを探索する手段があることになる。

一番高い可能性を誇るのは……監視カメラだろう。

一介の高校生がそんなものを所持しているとは考えにくいが洗脳なんてことをする時点で一介の高校生という枠を大きく逸脱しているだろう。

そこまで考えたところで、ふと違和感を感じた。

違和感の正体はすぐに分かった。

音だ。

それも、一般的な家ではまず、聞こえることのないような不快な音。

床を歩く足音でもなければ、包丁が食材を切る音でも、テレビのスピーカーから聞こえる音でもない。

何かが這いずるかのような耳に残る音。

そのうえ、何かを含んでいる。いや、まどつている。

水たまりを歩いた時のような音が混ざり、それを際立てる。

そして、その音は彼に近づいてきていた。

理解した瞬間、流風は躊躇うことなくその方向に向かって移動した。

この躊躇いのなさとは瞬間的に冷静な判断をくだせる力が彼の強みである。

音は相変わらず、不安なリズムのまま続くがスライド式のドアを開けると音の発信元である右側の廊下を首だけ出して確信する。

そこには、今、彼が相手にした不定形なゲル状の物体とまったく同じものがあつた。

通路を埋めつくすほど大量に。

第十四話 停滞（後書き）

感想やご意見をお待ちしています。
では、また次回

第十五話 系統（前書き）

お待たせしました。

新しい話です。

それにしても中々、ランキングには載りません……
めげずに頑張ります。

第十五話 系統

広い教室。

それ以外、表しようのない無機質で殺風景な場所だった。

時は三月、ちょうど中学校を卒業して五日後のことだった。

彼女——最上百合は要塞の中に入る時、必ず行わないといけない能力検査を受けて、能力保有者ということが判明した。

その結果として、彼女は今いる教室に来た。

教室と言っても学校の中ではなく、とある都心の高層ビルの中だった。

わざわざ、ここまで来る移動費用まで要塞内の職員が出してくれたことから彼らが——国がどれほど能力保有者を重宝し手元に収めたいかが分かった。

ここでは、能力保有者の要塞内での待遇や能力についての詳しい説明を受けていた。

白い長方形の机に三人ずつ能力保有者の学生が座り、彼らの視線の先では要塞の職員と思われる人物が熱弁を奮っていた。

「皆さんも知ってると思いますが私達能力保有者は通称『ホルダー』と言われています。ちなみに、要塞内ではホルダーと呼ばれる治安維持組織がいますが正式には『ロウ・ザ・ホルダーズ』と言います」

私達、ということは彼も能力保有者なのだろうか？

そんなことを考えている間にも説明はすらすらと続き、能力の特徴についての話に変わっていた。

「手元の資料を見てください。能力は大きく分けて五つの分類があり、『強化系統』、『自然系統』、『物質系統』、『特殊系統』、『融合系統』です」

配布された資料にはイラストつきで能力の詳細が記されていた。その内容をなぞるようにやはり、説明は続く。ここまで来ても熱弁を振る続けられるのは最早、称賛に値するのではないかとさえ思える。

「『強化系統』はその名の通り身体や精神を能力で強化する能力で、例を挙げると足が速くなったり、嗅覚が鋭くなったりなどで能力保有者の二割がこれに属しています。」

『自然系統』は世界で起こる人為的、自然的な現象が能力になのを指します。また、例を挙げるなら炎を出したり、電気を放電したりです」

一気に二つの能力分類について説明するところで彼は一息ついた。そして、少しすると最後の三つを若干、早口で説明し始めた。

「『物質系統』は能力が物質化して、私達が存在する空間に能力事態が出現します。どこから、出てくるのか？質量保存の法則はどうなるのか？といった議論は未だに続いています但答えは出てません。私の知り合いには冷蔵庫に似た能力を具現化した人もいます。」

『特殊系統』は今まで挙げた三つの能力のどれにも当てはまらないものでこの系統の能力保有者はとても珍しいです。

最後に『融合系統』は今まで挙げた四つの能力の特徴が掛け合わさっている能力のことを言います」

言い終わると彼は軽く辺りを見回した。

質問待ちなのだろうか？

そんな疑問を抱えながらも黙って百合は話を聞き続けた。

*

画面から送られてくる映像を見ながら最上百合はすっかり勝利の余韻に浸っていた。

映像には——全ての部屋の中を覆いつくすほどの彼女の能力——ゲルマインが溢れかえっていた。

彼女の能力資質は『特殊系統』。一見、『物質系統』に見えるのだがゲルマインは具現化する能力ではない。

ゲルマインの正体——それは水。

彼女の能力は『液体をゲルマインという半固体状の性質を持つ物質に変化させる』ことだ。

液体ならなんでもいいのだが、水は一番手ごろで手に入りやすいため彼女はよくゲルマイン合成のための素材に使う。

ゲルマインはそのゲル状の性質を生かして、物理的な攻撃なら大

抵遮断する。刀で斬られようが、ハンマーで殴打されようが、銃撃されてもすぐに元の形状に戻ることができる。

さらに、ゲルマインは『毒』を持つ。

その毒は獲物を仕留めるものではなく、獲物を生きのいい新鮮な状態で捕獲するためのものだ。

毒を獲物に浸透させる方法は二つ。

一．ゲルマインに触れる。

一．ゲルマインから精製されるエキスを何らかの方法で身体に接種する。

最初に流風が手に感じた違和感はお菓子の袋の中に仕込んでいたゲルマインに触り、麻痺が手から伝わったからだ。

さらに、ゲルマインの毒にも種類があり、相手の身体の筋肉や神経を麻痺させるものや相手に深い眠気を与え、眠らせるものなどがある。

後者の毒は先ほど、百合が流風を眠らせた際に使ったものでゲルマインから抽出した毒のエキスを注射器で流風の体内に注入したのだ。

この毒は即効性のものもあれば遅延性のものもあり、相手に後遺症を与えたりしない。

まさに、獲物を自分の思いのままに支配する欲求が高い彼女にはピッタリな能力だった。

徐々に流風のいる部屋に近づく、大量のゲルマインを見ながら百合は完全に冷静さを取り戻し、笑みを浮かべながら画面を見続ける。

先ほどは流風になぜかゲルマインの麻痺が効かなかったがこれだけの数ならそうはいかないだろう。確実に毒に蝕まれるはずだ。

さらに、毒がなくてもこの量なら一気に流風を包みこみ捕獲することができる。

敗因が一切見当たらない状況の中、百合は既に流風の処遇について考えていた。

——ああ、どうしよう。

——二度と逆らえないよう徹底的にやらないと。

——女装写真を実名つきでインターネットに流すって言えば、反逆を起こす気を失うのかな？

そんなことを思っていると画面の流風の動きに変化があった。

部屋の扉を完全に締め切り、扉の前に家具をありったけ配置する
と――

タンスの上に隠して置いていた監視カメラを掴み床に叩きつけた。

その瞬間、彼がいる部屋の映像が途絶えた。

それを見て、百合は少しだけ困ったような顔をする。

ゲルマインは基本的に自分が操縦しないと正確な動きができない。一応、自動操縦はできるがかなり大雑把な動きしかできない。

そのうえ、『ある程度の速さで動く』ものにしか反応できない。

このような欠点を補うために、本体である百合自信の意志で動か

す必要があるのだが、監視カメラの映像がなくなってしまうとゲルマインをうまく操縦することができない。

一体どうするべきかしばらく考えると彼女はゲルマインを再び操作し始めた。

まず、ゲルマインを操作して扉を開け、部屋の中に侵入。

その後、ゲルマインに別の部屋に仕掛けていた監視カメラを回収させ、部屋の中にいる流風を確認して捕獲する。

これなら、危険を冒さずに彼を確保できるだろう。

そう思う間にもゲルマインを器用に操作して、扉を開け、進行を邪魔する家具をどける。

これは、あくまでも廊下に設置したカメラから送られてくる映像なので部屋の内部は分からない。

だが、しばらくすると廊下の向こうから他の部屋に設置したカメラを持ってきた違うゲルマインが現れる。

これで部屋の中を確認できる。

そして、部屋の中にカメラが侵入する。

しかし、そこには流風の姿は影も形もなかった。

第十五話 系統（後書き）

感想やご意見をお待ちしています。

……新しい後書きの内容を今度考えます。

第十六話 思索（前書き）

色々考えたけど前書きで書くことは特にないです……

第十六話 思索

（いったい……どこに？）

苦手な想定外な状況にも関わらず、冷静に考えを巡らせることができるのは今、彼女が圧倒的優位に立っているからだろう。

安全なポジションからの攻撃、対象を一定の区間に閉じ込めるといった要因のおかげだ。

密閉された空間から人が消えられるわけがない。

もしかしたら、何らかの能力を使ったのではないかと思ったがそれは違うだろう。

流風のことは徹底的に調べていて彼は能力資質検査に引っ掛かっていないことが分かっている。

つまり、彼は能力保有者ではない。

ならば、彼は何らかの方法で部屋のどこかに隠れていると考えるのが普通だろう。

「ゲルマイン！」

ならば探し出すまでと思いゲルマインを操作する。

部屋に侵入させたゲルマインに持たせているカメラで周辺を確認する。

部屋の内部にはダンスやローテーブル、テレビ、本棚といった一般的な家具が荒らされることなく綺麗に配置されたままになっている。入り口付近とは打って変わった状態に顔を少ししかめるが構わず探索を続ける。

この部屋の出入口は一つ。

そして、その先の廊下には大量に増殖させたゲルマインが待ち構えている。

さらに、死角が無くなるよう監視カメラを配置しているのでまだ部屋の中に流風がいることが分かる。

陳腐な表現になるが袋のネズミ状態だ。

だから、百合は落ち着いていたのだが時間が経つにつれ、徐々に顔に焦りの色が見られた。

（おかしい……何処にもいない……）

部屋全体をカメラで見回ったはずなのに流風の影も形もない。

考えられることといったら部屋に潜行させたカメラの死角にうまく入り込んだとしか……

その結論に至った瞬間、廊下に待機させていたカメラの一つを現在、部屋の中を撮影しているカメラの背後に移動させる。

だが、流風はいない。

（！……いつたいどこに？）

流石にこの時ばかりは動揺せずにいらなかった。

部屋に隠れられる場所などないうえ、くまなくカメラで撮影している。

それでも見つからない。

彼女の焦りがピークに達する頃。

蓮見流風本人はマンションの外に出ていた。

「んっ」

おもいつきり体を伸ばす。（念のために捕捉すると実際に伸びているわけではなく、眠い時などに体を伸ばすような動作のことだ）

夕日が目にしみるぜという最早現実で使用する人無しの言葉を思い浮かべながら外の空気を吸っていた。

ちなみに夕日は出ていない。

代わりに月光に当たっている。

現在時刻は流風推定七時から八時、真っ暗闇というわけではなく遠くの空は薄い赤色で染まっている。

マンシヨンの外に出た流風は現在、彼女の家とっていた蓮見流風専用拷問兼収容監獄（本人命名）の扉のすぐ前に立っていた。

呑気そうにあくびをしているが普通この状態でするようなことではない。

もし彼が常人なら今すぐにも警察関係の建物に逃げるなり、道行く人に助けを求めるなりするはずだろう。

だが、残念というべきか褒めるべきか蓮見流風という人間は色々な意味で常人とは、ずれているような思考を持っているのだ。

普段の流風なら警察を呼ぶと百合が逮捕されてしまうと考え、なんとか彼女にストーリーカーじみた先ほどまでの行為を止めさせようと

説得しようとするだろう。

この『やさしさ』が普通の人とはずれたところである。自分に危害が及んでいながらも危害を及ぼした相手のことを案じ話し合おうとする。

小さい子供の頃なら優しさという言葉で済んだのだがこの年になるとその考えは『ずれている』と言った方が適切なのかもしれない。長所と短所の性質を併せ持つその考えは意外と言うか当然と言うか、彼を好きになる要素の一つと化している。

最上百合が彼を好きになった理由の一つにも該当する。

しかし、このまま説得に行っても流風は百合に再び捕まるどころかその優しさのところでもますます惚れられてさらに、彼を自分の虜にしようとして悲劇（百合に洗脳されたら喜劇とを感じるようになるだろうが）の結末を迎えることになっただろう。

だが、今の流風は違った。

常識から少し外れた考え方をする流風ではない。

だからといって常識的に考える流風でもなかった。

「……ふふ」

楽しそうに微笑むその笑顔にはいつものような無邪気さが含まれていない代わりに見るものを思わず『安心させる』ものが含まれていた。

相手が気を許し、彼に好かれない、誉められない、喜ばれたいと思わせる雰囲気がある今の彼にはあった。

もし、彼を知る人物が今彼と話したのならば人が変わったと思うだろう。

そして、実際に変わっているという事実気づいているのは『今の蓮見流風だけだろう』。

*

（もしかして、既に部屋から移動している……）

最上百合は送られてくる映像を焦りながら見て、そう考えていた。以前までの彼女ならここで最悪の事態を想定させて体を冷水を浴びせられたかのように震わせていただろうが今の彼女は違った。

元々、冷静沈着だが想定外の事態に弱いという性格だったのだが彼を好きになっていらい徐々にその弱点は完全にはいかないまでも克服してきていた。

先ほどはゲルマインの攻撃をかわされた時は思わず動揺してしまったが今は逆に段々、冷静になってきていた。

彼女が狂喜に目覚めたのは彼と会ってからだろう。

正確には彼と会う以前から持っていたが、ますます強くなったと言っべきなのかもしれないが。

（流風様にはきちんとして、このことを他言したりしたら、インターネットにさっき撮影した写真をばらまいて二度とまともな社会生活を送れないようにすると告げているから、下手な抵抗はしないはず……）

例えば自分が捕まっても写真は流出するとも言っている。

さらに、百合には流風が絶対に誰にもこのことを言わないというある“確信”があった。

その“確信”がある限り、自分は流風のことを思いのままにできるところにもまた確信していた。

（それにしても、何処にいるの……カメラには映っていないからやっぱりあの部屋の中にいると考えるのが妥当……仮にいないとしても家の何処にいるはず）

違うモニターを見るとそこには玄関の扉にはりついたゲルマインがいた。先ほどから微動だに变化していない。

「何処に……何処に……」

怨念のように呟きながらひたすら画面を見渡すがそこに流風はいない。

彼女は気づいていない。

既に流風はその監獄から脱出している。

それどころか――

「僕ならここにいますよ」

その声が彼女のいる部屋に低く響いた。

その瞬間、彼女は完全に凍りついた。

聞き覚えのある声だった。

中学生の頃から片思いでずっと手に入れたくて、今、あの部屋にいるはずの声だった。

「僕を監獄じみたところに監禁するなんてひどいじゃないですか
百合さん」

蓮見流風は彼女の背後に静かに立っていた。

第十六話 思索（後書き）

感想やご意見をお待ちしています。

もう日刊ランキングに入らないことを愚痴るネタもやりつくした
な……

第十七話 激突（前書き）

久しぶりに更新しました。でも、二週間後、テストなのでまた、しばらくないかも……
とりあえずどうぞ。

第十七話 激突

虚をつかれるというのはこういうことをなのだろう。

意外にも百合はそんなことを思えるくらい冷静でいた。

机のイスを回転させゆっくりと声の発信源に振り返る。

今、彼女がいるのは彼女の本当の家。

そこには、流風を偽って連れていった家のような不自然さはない。代わりに生々しい生活感があつた。

だが、その生活感というものは実に奇妙、いや、恐怖が孕まれていた。

四方八方の壁にはドラマに出てくるストーカーのようにいくつもの流風の写真がはりつけられ、本棚や机の上には彼の姿を模したぬいぐるみやどこで手に入れたのかが見当もつかない拘束具があつた。異質すぎる狂気の空間で向かい合う二人。

やがて、沈黙を破るかのように百合が口を開いた。

「……どうして此処が分かったの？」

それは素朴な疑問だつた。

彼が百合の本当の家を知っているわけがなければ知るすべもない。

それなのに彼は今、彼女の目の前にいる。

疑問にならないわけがない。

そんな疑問を流風は微笑みながら答えた。

「そんな難しいことじゃないよ。あの偽物の百合さんの家に僕を閉じこめた。当然、百合さんは僕を監視しようとするはず。でも、そう考えると少し気になるところがあるんだ」

自身の写真で溢れかえった部屋を嫌悪感や恐怖心がまったくないといった感じで見渡しながら流風は説明を続ける。

「なぜ、百合さんは僕をマンションの部屋の一つに閉じこめたか？ 冷静に考えれば結構おかしいですよ、だってマンションの一室っていうことは当然、管理人のチェックがあるっていうことになりますよね。自分の部屋ならともかく、違う部屋に監禁するなんて結構なリスクがありますよ。それで少し考えたんです」

外から雨の音が聞こえてきた。
中々強い音だった。流風の声ははつきりと彼女の部屋の中に響いた。

「僕が知る限り百合さんは慎重でミスをしないように気をつける人です。だから、僕の監禁場所をあそこにしたのにも何か理由があるんじゃないか？ それで推測してみたんですけど……」

流風が微笑み絶やさず自分の考えを話す間にも雨は激しさを増していった。

「もしかして、僕が監禁された場所から百合さんの本当の家が近いんじゃないか？ って」

流風の説明を黙って聞いていた百合は何故かいつのまにか流風と同じように微笑んでいた。

その間にも流風の説明は終盤を迎えていた。

「遠くに監禁したら様子を見たり、管理するのに結構な手間やかかったり誰かに発覚する危険性がとても高い。だからこそ、監禁場所を近くにしかつた。そこで“ある方法”で調べたら百合さんを見つけたんですけど……驚きましたよ、まさか、監禁された部屋の隣にいたなんて……」

言葉とは裏腹に流風の表情や言葉にはまったく驚いたような感じがなかった。

「ちよつと間違えていますね」

彼の説明が終わると同時に今度は百合が話し始めた。

「隣の部屋と今の部屋、両方とも私の家なのよ。最初は私が生活する部屋に閉じこめようと考えたんだけど隣の方が都合がよかったの」

「へえ、どうして？」

「どの部屋にしても勝手に誰かが入ることはないんだけど……まず、あっちの部屋は防音だし……」

百合がそこまで言った時、流風は何かの違和感を感じとつた。特におかしいところはないように思えるが直感が頭の中で警報を発していた。

それに従ってまず、百合を凝視する。最後に会った時と変わらない学生服を着ていて、両手は何も握られていないうえ、何かを隠し持っているようにも見えない。

視線をそらしていることを悟られないように周囲を観察してみる

が異常である部屋ということを除けば特に危険性はない。物音一つしないのが余計に不安を駆り立てる。

なら、この背筋に冷や水を浴びせたかのような感覚は何なのか？相変わらず、外に降り注ぎ続ける雨が窓越しに目に映る中、微笑みを崩さずに、不快な感覚の原因を模索する。

（……それにしても激しい雨だな）

こんな非常時にも関わらずふと、そんなことを考えてしまった。集中しているにも関わらず唐突に別のことが頭に思い浮かぶというのはよくある。

だが、今じゃなくても……と自分に呆れているとあることに気づいた。

先ほど、視界には窓越しに激しく降り注ぐ雨が見えた。だが、この部屋を不気味に思わせる要因の一つは

物音一つしないこと

だが、確か先ほど彼女は

——まず、あっちの部屋は防音だし

つまり“ここの部屋は防音ではないが隣の部屋は防音である”という意味だ。

なら、なぜ豪雨の音が聞こえない？

この部屋に入る少し前、外にいたから分かるが外の雨はかなり激しかった。

そして、音も同様に激しかった。

今は屋内にいるがそれでも音は少しくらいは聞こえるはずだ。

そう思った瞬間、背後から低い音が聞こえた。

その音は静かな空間だけによく響き、何か不吉なものを感じさせた。

（何かいる！？）

少し驚きながらも直感的に横に跳ね飛ぶ。それと同時に今まで自分がいた場所に鋭い動きで先ほどまで自分と戦っていたゲル状の物体が突進してきた。それは攻撃というよりは獲物を丸呑みするような動作だった。

間一髪で回避に成功し、安堵する間もなく違うゲル状の物体がまた、襲いかかってくる。

（……見た目は同じだけど動きの精度や速さが格段に上だ）

そんな状況になっても流風は平然としている。

今の彼は明らかに普段の彼とは違いまるで“別人”のようだった。

何とか体制を整え百合の方を向くとそこには彼女と複数のゲル状の物体がいた。

ゲル状の物体は百合を囲むように布陣し、彼女を攻める隙はまったくなかった。

壁や床に張りつき、蠢くそれはまるで生物のようだった。

流風と百合の間には約十メートルの距離がある。

しかし、決して近づくことのできない溝のようなものが間にあっ

た。

「フフ、残念でしたね、流風様。こういう不足の事態に備えて私の周囲には常にゲルマインを潜ませているんですよ」

「へえ、ゲルマインっていうんですか、これ」

「はい、ちなみに流風君が親切に説明している最中にこの部屋の窓と扉にもくつつけたので脱出や助けを呼ぶことは不可能よ」

雨の音が聞こえなかった理由に納得しつつ流風はまるで朝食は何だったかと聞くようなほのぼのとした感じで百合にある質問をした。

「さつきから気になっているけどなんで、百合さんは僕に対する口の聞き方が変わるの？」

「ああ、それは流風君を愛していることを表そうとしているのですが恋人としてと敬愛としての感情が両方とも私の中にあるから両方とも伝えようと思っただけのことです」

「……百合さんってクールキャラだと思っていただけで相当な電波キャラだったんだね……」

苦笑しながらもさらに、流風は質問を続ける。

「じゃあ、ついにもう一つ聞くけど、監禁なんてして僕がまともな精神を保っているうちに誰かに相談したり、警察に駆け込むってことは考えなかったの？」

最も質問をされ、百合はしばらく考え込んでいたがやがて口を開いた。

満面の笑みを浮かべながら。

「それは私が流風君のことを深く知り尽くしていたからです。もし、そういう機会があったとしても流風様はきつと私のことを案じて誰にも言わず一人で説得しようとしにくるはずだって私は思ったんです……そして、思ったとおりあなたは抜け出したにも関わらず私のところに来た！ ああ！ なんて、優しいんでしょう流風様は！！ 抱き締めたい！ 愛でたい！ 可愛いがりたい！ 愛し合いたい！」

感情が爆発したかのように彼女は嬉しそうに言い放った。

恍惚の表情を浮かべながら思いの丈を言った彼女はまるで異端の宗教にどっぷりはまってしまった信者のような純真さと狂気を持ち合わせていた。

彼女の言葉はゲルマインによって防音にされた部屋の中によく響き、より一層、恐怖心を煽りたてるようだった。

ただ、

それでも、彼は、

蓮見流風は微笑んでいた。

（君が僕のことを知り尽くしている……確かにそうだね。でも……）

微笑みながら流風は静かに思った。

そうしているこの瞬間にも百合が攻撃体制に入ろうとしているにも関わらず。

（残念ながら“さっきの僕”と“今の僕”は……）

薄い笑いを決して絶やさず、彼は服のポケットから柄の部分に果樹園の風景が彫られたナイフを取り出し、左手で握りしめた。

それと、ほぼ同時に部屋の中にいる全てのゲルマインが動いた。目指す先にいるのは当然、蓮見流風。

それでも彼は焦ることなく、自らの意志で彼女に向かって走り出した。

そして、静かに思う。

（——別人だよ）

と。

そして、彼は、

蓮見流風は

要塞内連続殺人事件の犯人は最上百合に向かって走った。

第十七話 激突（後書き）

感想やご意見をお待ちしています。

まあ、感想とご意見なんて一回しか来たことないんですけどね…

…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1828x/>

魔王の教典

2011年11月20日15時15分発行